バカとテストと傭兵稼業

920P

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとテストと傭兵稼業

【Ｎコード】
Ｎ１０９８Ｑ

【作者名】
９２０Ｐ

【あらすじ】
一条雅臣は、文月学園の二年生。期待に胸躍らせ振り分け試験の結果を受け取る彼だったが、書かれていたクラスは何と存在しないはずのＧクラスだった。《特異点》と呼ばれる少し特殊な生徒である雅臣は、学園長の差し金で隔離されてしまったのである。たった一人しかいないクラスで、成績を報酬代わりに試召戦争内で傭兵稼業を始めることになった彼の運命や如何に――！（原作のキャラが崩壊している面と、原作キャラの過去を捏造している点がいくつか存在します。また、更新時間は不定期です）

プロローグ

☆

「学園長！」
「なんだい、随分と騒がしいじゃないか西村先生。らしくもない」
「新二年生の振り分け試験、その結果についてお聞きしたいことがあります」
「……ふむ、何か問題でも？」
「一条……、一条雅臣についてですが」
「なるほどね。アンタの言いたいことはわかったよ」
「何故です？　一条は決して悪くない成績をマークしていたはずですが、何故……」
「あのガキはね、《特異点》さ」
「《特異点》……？」
「そう。この試験召喚システムの謎を解き明かす鍵を握っているかもしれないんだ。観察処分は当然さね」
「ですが……。それならば通常のクラスに所属させても可能ではないのですか？」
「いや、隔離していた方が色々とやりやすい。それだけのことさ」
「それだけで……、それだけでクラスを一つ、増設するのですか？」
「ああ、そうさ。あのガキにはそれだけの価値がある」

☆

俺が文月学園に入学して、ようやく二度目の春がやってきた。

試験召喚システムという他の学校にはない独自のシステムを取り入れているこの文月学園では、勉強に対するモチベーションを上げさせるために試験召喚戦争という、クラス間での疑似戦争を行っている。

一年次には二、三年の試召戦争を眺めていることしかできなかったが、今年からは俺たちがその立場に立つことが出来るようになったのだ。

元々このシステムが興味深かったがために文月学園への進学を決めた俺にとって、実際に自分が試召戦争に参加できると思うだけでたまらない。

校舎へと続く道の両脇で咲き誇る桜は、まるで俺の気持ちを祝福してくれているかのようだ。自ずと、校舎へ向かう足も軽くなる。

一年次終わりの振り分け試験で二年次のクラスが決定されるが、果たして俺はどのクラスになっているのだろう。

願わくば、折角仲良くなれた去年のクラスメイト――明久や雄二達と一緒のクラスになれればいいのだが。

彼らと力を合わせて試召戦争を戦い抜くのだと考えるだけで、心が震える。武者振るいまでしそうな勢いだ。

「さあ、クラスはどうなってるかな？」

だが、俺が普通に夢を抱いていれたのは、その時までだった。

☆

「お前か……一条」

「あ、おはようございます」

生徒達がちらほらと見受けられる玄関に辿り着くと、そこには浅黒い肌の筋骨隆々とした教師、鉄人――もとい西村教諭が立っていた。

トライアスロンが趣味であるためにあだ名が《鉄人》という、どこからどう見ても肉体派の生活指導担当教諭だ。俺の去年の担任でもあり、それなりにお世話になった。

なったのだが……、先生が俺を見る目がどうも憐憫の情に包まれているような気がするのは何故だろうか。

気になったので、尋ねてみる。

「どうかしたんですか、西村先生」

「いや……、強く生きろよ、一条」

いきなり不安げな一言を頂いてしまった。

なんだ、俺が何かをしてしまったとでも言うのか？

まさかのFクラス配属……、いや、振り分け試験はそこそこ手応えがあったので、良ければBクラスには入れているはず。Cクラスが平均的なクラスなので、そこに配属されたとしても、問題はない。

俺の通う文月学園は学力によるクラス編成方式を取っており、一年終わりのクラス振り分け試験の結果に応じて、成績順でクラスが決まっていく仕組みになっている。全部でAからFまでの計6クラスあり、頭が良い人はA、対照的に宜しくない人はFクラスに配属されることになる。

BとCなら悪くないところだろう。

「振り分け試験の結果、頂けますか？」

「……一条、俺はお前が悪い生徒でないことは十分把握しているつもりだ」

「え？　あ、はい。ありがとうございます」

「恨むなら、先生を恨め。……すまない」

随分と意味深な台詞を残し、西村先生が封筒を取り出した。
周りの生徒達がその中身を見て一喜一憂様々な表情を見せているので、おそらく個人の所属クラスが書かれているのだろう。
俺は非常に楽しみな気持ちを抑えきれず、上機嫌でその封筒を受け取った。

「……一条。俺はお前を応援しているぞ」

固く糊付けされた封筒を開けるのに悪戦苦闘していると、西村先生のそんな言葉がかかった。
いったい何を言っているのだろう。疑問に思いつつも、俺は何とか封筒を開け、その中で折りたたまれた紙を抜きだした。

『一条雅臣　所属：Gクラス』

「……ん？」

この学校、Fクラスまでしかなかったような……。

プロローグ（後書き）

後書きは後で追加します

プロローグ？

『一条雅臣（いちじょうまさおみ）　所属：Ｇクラス』

目を疑うような、所属クラスの文字。
小さな紙に印刷されたその文字は踊るように俺の脳裏を跳ね回る。
理解できない。よく考えろ、普通はＡクラスからＦクラスまでの通常６クラス体制だ。
じゃあ、ここに書いてある文字はいったい……、いった――、

「――あんのババァァァァッ！」

全てを一瞬で理解した俺は、何か声をかけようと躊躇っていた西村先生を尻目に学園長室へとその足を向けていた。
全速力で廊下を走り、注意してくる教師は無視し、辿り着いた学園長室への扉。一年の時にも幾度となく入った部屋なので、最早何の躊躇いもない。
ノックなんてまどろっこしいことはしていられないとばかりに、俺はドアを蹴破る勢いで学園長室へ入った。

「ふん、やっぱり来たかい」
「当然だクソババァ！」

俺はずかずかと大股で歩き、優雅にデスクでコーヒーを飲んでいた学園長――藤堂カヲルに向かって口を開いた。

「これがどういう事か説明して貰おうかクソババァが！」

「相変わらずババァババァと礼儀を知らないクソジャリだね」

ばん、と件の所属クラス発表用紙を叩きつける。こんな無茶苦茶やらかすのはこのクソババァこと学園長しかいないし、こんな事をして許されるのはこのクソババァしかいない。何故なら学園の最高権力者だから。

科学とオカルトと偶然によって完成した試験召喚システム、その開発者にして文月学園の学園長。当然、その権力は学内トップに位置する。

本来ならば俺のような生徒が易々と会話できる間柄でもなければタメ口をきける間柄でもないのだろうが、生憎とこの学園長とは去年から色々縁があるため、俺にとっては慣れっこになってしまっている。

「Gクラスなんて新しすぎるクラスを作ったのはアンタの差し金だろ」

「そうさね」

「理由は何だ？」

長い白髪に妖怪と見紛う外見を持つ学園長を詰るような勢いで問い詰める。

折角俺が二年生からの新しい学園生活を楽しみにしていたというのに、結果Gクラス配属だと？

正当な理由を聞かない限り俺には到底容認できるような事じゃない。

「やれやれ、最近のガキは答えを全部言ってやらないとわかんないのかい」

「見当はついてるけど、アンタの口から聞かないと納得は出来ないね」

「ああ、そうかい。じゃあ何度でも言ってやるさ。アンタが《特異点》だからさね」
「ちっ――やっぱりか」

学園長の口から飛び出した単語に、俺は舌打ち混じりに呟いた。《特異点》……それこそ、俺が学園長と否応なしに関わらざるを得なくなった理由の一つである。

文月学園に点数の上限がないテストが導入されて数年。無制限に出てくる問題を制限時間内に解いていくという方式を採ったため、実力があればその分成績を伸ばせるのがこの文月学園の特徴となっていた。

そして、そのテストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を試験召喚システムによって喚び出し、戦わせる――それが、学力低下が嘆かれる昨今、生徒達の勉強に対するモチベーションを高めるためここ文月学園で提案された先進的な試み、召喚獣を用いたクラス間での疑似戦争こと試験召喚戦争、略して試召戦争だ。

試召戦争で自分の代わりに戦わせる召喚獣。一般的な生徒ならば、テストの点数に応じた召喚獣が出てきてはい終わり、といったところなのに対し、《特異点》と呼ばれる俺はそうは行かなかった。

俺には何故か試験召喚システムの調整等、様々なデータが反映されず、本来ならば教師の認証が必要な試験獣召喚を無許可で行えたり、一定以上の得点をマークすると召喚獣が身につけることの出来る特殊な腕輪が始めから装備されていたりと、とにかく普通の生徒ではあり得ない現象を多数引き起こしたのである。

そのため俺は《特異点》と呼ばれ、未だ全容の解明がなされてい

ない試験召喚システムについて更に深く理解するために、一年生の時点から学園長や他の先生による様々な実験に付き合わされていたのだ。

「で、俺はどうすればいいんだ？」
「フン、大人しく協力すりゃ良いのさ。まだアンタの謎は二割も解けちゃいないんだからね」
「まだあんなめんどくさい実験に付き合わされるのか……」
「で、話はそれだけなのかい？　だったらとっとと消えな」

そう言って、学園長は俺を手で追い払うようなポーズを見せる。
だが、話はまだ終わっていない。

「Gクラスには俺一人が所属するんだろ？」
「そうさ」
「じゃあ、試召戦争はどうなる？」

そう、これが一番の問題だ。
俺にとって試召戦争はこの学校に入学を決めた一番の理由なのだから。
参加できないとなると流石に寂しすぎる。というか、《特異点》であることを活かして暴れまくる準備は出来ている。

「フン、参加すればいいじゃないか」
「たった一人でか？」
「ま、そうさね。ただし……《傭兵》役でさ」

聞き覚えのない単語に、俺は眉を顰めた。

「なんだ？　それは」

「ほら、受け取りなクソジャリ」

言われ、金属製の薄いプレートが数枚投げつけられた。何とか空中でキャッチ。

表面を見てみると、文字が書いてあった。《甲》と書いてあるそれは金色で、他に銀色の《乙》、赤褐色の《丙》がある。

「それはアンタの成績代わりになる《プレート》さね。アンタはこれからそのプレートを集めるんだ」

「待て、意味がわからない」

「アンタは、《傭兵》……つまりフリーの立場から試召戦争に参加するのさ。既に各クラスの代表にこのプレートを数枚配ってある。アンタはこのプレートを報酬代わりに、各陣営から試召戦争に参加しろってことさね」

「《傭兵》ってのはそういうことか……」

「そう。プレートを集めるため、各陣営を渡り歩いて試召戦争に参加しな」

「プレートを集められないとどうなる？」

「進級は認められないねえ」

くくく、と楽しそうに学園長は笑う。

「つまり、より多くのプレートを報酬として提示した陣営に着いて、試召戦争を戦えと？」

「いや、それは個人の自由さ。どこに着くのかはあんたに任せる。ただし、プレートの総量は一定だから、一つのクラスだけに肩入れすれば当然プレートが集まらなくなる。よく考えて行動するんだね」

「なるほどな。……面白い事してくれるじゃないか、ババァ」

「フン。いちいち文句ばかり言わないと生きていけないのかいアンタは」

「いや。試召戦争が楽しみになってきた。他に細かいルールはないのか？」
「ま、後で折を見て知らせるよ」
「わかった。邪魔したな」
「じゃあとっとと消えな」

相変わらず口の減らないクソババァだ……。
だが、新しく提示された俺の学園生活に、少しだけ光明が差した気がした。
実に面白そうじゃないか……《傭兵》生活なんて。

第一問

学園長室を出て腕時計に目をやれば、もうそろそろ各クラスでホームルームが始まる時間が近づいていた。
掛け足で階段を登り、二年生に割り当てられた三階へと向かう。
新校舎側の階段を使ったため、辿り着いてすぐに学園のクラス格差を体現した存在――Ａクラスの教室が目に入った。

「うわ……こりゃすごい」

噂には聞いていたものの、自分の目で見るのと見ないのとではすごい差があった。
普通の教室が数個は入りそうな広大な空間に、五十人の生徒が悠々として居り、その彼らの手元にはシステムデスクや個人用の冷蔵庫、加えて椅子はリクライニングシートと完全にＶＩＰ待遇の態だ。思わずため息が漏れる。
同じ学費を払っているというのに――と言っても俺は《特異点》のこともあってか少しだけ割引されている――、かたやＡクラス。かたや、たった一人しか存在しない謎のＧクラス。この差は何だ。
聞く分には《傭兵》稼業は面白そうだと感じたものの、少し落ち着いてみると上手く口車に乗せられただけのような気がしてならない。
くそう、あのババァ、いつかシバいたる。
そんな危険な思想を頭の片隅に追いやりながら、俺はＡクラスの観察を終え、自分のクラス――Ｇクラスの教室が存在する旧校舎側へと足を向けた。
もうすぐＨＲが開始されるので、廊下にあまり生徒の姿は見受けられない。俺はのんびりと歩いていき――、新校舎と旧校舎を繋ぐ渡り廊下で見知った背中を見つけた。

「よう、明久（あきひさ）」
「あ、おはよう雅臣」

軽く手を挙げ、挨拶する。
後ろ姿のそいつはこちらを振り返り、笑顔を返してきた。
彼の名は吉井明久（よしいあきひさ）、一年次に俺と同じクラスだった友人で、よくつるんでいた仲だ。今年からは同じクラスになれないのが残念で仕方ないが……仕方あるまい。

「随分遅かったな。ギリギリじゃないのか？」
「それは雅臣もでしょ」
「まぁ、それもそうだけど」

純真な笑顔を見せる明久に対し、学園長室で学園長をババァ呼ばわりしてきたとは言えなかった。

「雅臣、クラスはどうだったの？」
「ん？　ああ、クラスね。Gだ」

ひらひらと手に持っている封筒を振りながら、明久が訊いてくる。
隠すほどのことでもないので（というかどうせバレるし）正直に答えると、何だか同情したような視線を投げかけてきた。

「雅臣……まさか僕よりもバ」
「それ以上言うな。そんな理由じゃない」

明久は気の良い奴だが、バカである。《観察処分者》などというバカの代名詞を冠するまでにバカである。
そんな明久に憐れみの視線を向けられるともの凄く悲しい。何と

いうか、プライドがズタボロになると言うか。
いや、決して悪い奴じゃない……、ただ、こいつにだけはバカ呼ばわりされたくないのだ。

「じゃあどうしてさ。Fクラスまでしかないのに、それよりも下だなんて」
「んー、まあおいおいわかることだと思うけど、俺の特殊な性質のせいだってさ」
「ああ、なるほど……」

納得がいったように、明久が頷いた。彼も俺の特殊さ――《特異点》であることを知っている。学園側の思惑で隔離されてしまったことを悟ってくれたのだろう。

「頑張ってね、雅臣」
「ああ。ところで明久は……Fクラスか、やっぱり」
「うん。Dくらいは行けたと思ったんだけどね」

言っちゃ悪いけど無理だと思う。
Fクラスの教室前まで到着した明久と別れ（その際同じく去年のクラスメイトである坂本雄二（さかもとゆうじ）の声『早く座れ！　ウジ虫野郎！』が聞こえてきた）、俺はFクラスの隣、元は空き部屋だったであろう教室に辿り着いた。
二年G組と書かれたプレートがあるので、やはりここがそうなのだろう。
勢いよく扉を開けると、教室にはぽつん、とちゃぶ台が一つ。そして畳。

「な、なんじゃこりゃあああああ！」

あまりに酷すぎるGクラスの扱いに、俺は泣いた。

☆

Gクラスはホームルームに教師が来ないというあまりにも画期的な試みを行っているらしく、先生が連絡事項の書いてあるプリントだけを持ってきてそのまま去っていってしまった。俺にかまけている時間がもったいないということなのだろうか。

これからの事を思い少しブルーな気分になっていると、突然教室の扉が開かれた音が耳に入った。

視線をそちらへやれば、野性味溢れる顔に楽しそうな笑みを貼り付けている友人、坂本雄二の姿がある。去年同じクラスでよくつるんでいた友人その二で、かつては神童とまで呼ばれていたらしい。

今はその成りを潜めてはいるが、リーダーシップに溢れているのできっと何かをやってくれるんじゃないかと密かに期待している。

ちなみに、雄二の後ろには明久もいるようだ。

「よう、雅臣」

「Gクラスの設備も酷いね……」

「よく来たな、お前ら。歓迎するぞ」

知り合いの顔が見れるだけでも何だか幸せだ。

俺は立ち上がり、二人を教室へと招き入れた。雄二が先に入り、それに続いて明久も教室に入る。

「しかし本当にお前一人だとはな……」

雄二が教室を見回しながら言った。文月学園は本来ならば一クラ

ス五十人。
Ｆクラスもこの教室と同じスペースで五十人を収容しているのだから、随分と広く感じるのだろう。
「まぁ、ババ――学園長が無理矢理通したんだ」
「今学園長のことをババァ呼ばわりしそうになってなかったか？」
「気のせいだ」
会話を交わしたら雄二だってあれをババァ呼ばわりしたくなるはずだ。
「ところで二人とも何で廊下に？　ホームルーム中じゃないのか？」
「なに、このバカが話があるらしくてな」
そう言って、雄二は明久を指差した。視線を向けると、明久が照れたように笑いながら口を開く。
「うん、ちょっと……試召戦争をしかけようかなって」
「おお」
「まさか明久からこの言葉を聞くとは思わなかったけどな」
笑いながら、雄二が続ける。
なるほど、試召戦争に乗り気なのか、Ｆクラスは。
「狙いはＡクラスか？」
「当然だ」
「なるほどなるほど」
最低設備のＦクラスが最高設備のＡクラスに挑む。いやはや、燃えるシチュエーションだと思う。いつだって、弱い立場のものが強

い立場のものへ挑む姿は熱くて燃えるのだ。
それに、雄二や明久には何か成し遂げたいことがあるといった思いが見て取れる。人間の原動力は強い思いだ。もしかすると、彼らはやってくれるかもしれない。
と、そこで俺も無関係ではないことに気がついた。

「雄二、Ｆクラスの代表は？」
「俺だ」

話が早くて助かる。

「俺の立場を知ってるか？」
「ああ、聞いた。《傭兵》だったな。このプレートが契約金代わりなんだろ？」

そう言って、雄二は俺が先ほど学園長室で受け取ったプレートと同じ代物を取り出した。金銀銅、各四枚ずつ持っているようだ。

「俺の成績のためにも是非贔屓にして貰いたいね」
「ああ。お前の学力はＦクラスにとって大きな武器になる。期待させて貰うぜ」
「楽しみにしてるよ」
「ねぇ雄二、どういうこと？　話が見えないんだけど」

不敵に笑い合う俺と雄二の横では、明久が不思議そうに首を傾げていた。
なーに、いずれわかるさ、俺の立場が。

☆

雄二と明久が教室へと戻っていって数分。壁を挟んで隣のＦクラスからは、生徒達の声が木霊していた。
おそらく雄二がＡクラスへ戦争を仕掛けることを提案したのだろう。きっと皆、そんなものは無理だというに違いない。なにせ相手は化け物揃いのＡクラス。対して戦争を仕掛けるのは違う意味で化け物揃いのＦクラス。
勝負の結果は火を見るよりも明らかだ。

と、普通なら思うだろう。
だが、あのクラスには明久がいるし、きっと――、ムッツリーニや秀吉もいるんだろう。彼らの成績を思い出せば何となく予想がつく。
キワモノ揃いだが、それを纏めるだけの手腕を持った雄二がいる。きっとＦクラスはやってくれるに違いない。
そして、願わくば俺も、彼らと共に戦争に参加してＡクラスを打ち負かしたい。
明久や雄二達と共に、この戦争を戦い抜きたい。
それが、俺の願いだ。

「――つっても、このルールだと色々厳しいかもなあ」

嘆息し、手元に置かれたプリントに目を走らせる。
先ほど届いたばかりのプリントで、それには《Ｇクラス特別ルール》なる試召戦争の新たなルールが纏められていた。

《Ｇクラス特別ルール》

一、原則としてGクラス所属の生徒は《傭兵》としての立場においてのみ試召戦争に参加することが可能。

二、《傭兵》は、各クラスに甲乙丙各四枚ずつ支給した《プレート》を報酬とし、試召戦争に参加するものとする。

三、試召戦争開始前、《傭兵》の参加を望む各クラス代表は、立会人付きのもと《傭兵》に試召戦争参加への報酬として受け渡す《プレート》を提示する。何枚でも《プレート》の提示は可能だが、一度報酬として提示した後、プレートの数を増減させることは不可。また、以後はプレートの再支給を行わないため十分留意すること。

四、《傭兵》は自身の意志と提示された報酬を元に、所属するクラスを決定する。プレートを報酬として提示しないクラスへの協力は不可。

五、試召戦争に参加している《傭兵》は原則所属クラスの生徒とみなす。召喚獣が戦死にいたると0点となり、他の生徒同様その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。

六、《傭兵》が、敵対クラスの代表者を戦死させた場合、逆に《傭兵》側のクラスを敗北とみなす。

七、試召戦争が日を跨いで行われる場合、《傭兵》の所属クラスは一旦リセットされる。再度クラス代表同士で報酬提示を行い、《傭兵》は所属クラスを選択する。

八、プレートは《傭兵》の成績となり、学期末に所持しているプレートの数に応じて評価を決定する。

九、原則として《傭兵》としての参加を義務づけるが、Gクラスの生徒として宣戦布告することも可能。その際には甲プレートを一枚消費することとする。また、甲プレート一枚、乙プレート二枚、丙プレート四枚をそれぞれ等価とする。

十、このルールは適宜追加修正を行う。

とまあ、こんな所だろうか。

つまり俺は望まれなければ試召戦争への参加は出来ず、宣戦布告をするにしても成績を手放す必要があるというワケか……。中々難しいものだ。

現在俺の手元にあるのは甲乙丙のプレートそれぞれ一枚ずつ。

仮に宣戦布告をするにしても、一番価値の高い甲プレートをいきなり失うことになるから、まずはFクラスの試召戦争にお呼ばれする他はなさそうだ。

「ま、面白そうではあるんだけどさ……」

嘆息し、俺は教室の天井を仰ぎ見た。

出来るならば早めに試召戦争を体験したいものだ。

第二問

昼休みになって廊下が騒がしくなってきた頃。
俺もそろそろ昼食を取ろうかと立ち上がったら、タイミングよく一人の男子生徒が姿を現した。
見慣れない顔のその生徒は、後ろに学年主任の才女、高橋洋子先生――通称高橋女史を連れている。彼女知的な佇まいが印象的な妙齢の女性で、クールな女性が好みだったりする俺にとってはどストライクだったりするのだがまあそれはどうでも良い話だ。
男子生徒はずかずかとこちらへ歩み寄り、俺に向かって自身の名を告げた。

「Dクラス代表の平賀だ。こっちは立会人の高橋先生」
「宜しくお願いします」
「はあ……どうも」

突然の自己紹介に、生返事を返すしかできない。
Dクラス代表が、Aクラス担任の高橋女史といったい何の用事があってここに――って、まさか。
俺の脳裏に浮かんだ一つの答えに違わず、平賀は胸元から三枚のプレートを取り出した。

「Dクラスは、《傭兵》に対して乙プレートを一枚と、丙プレートを二枚、報酬として提示する」
「Dクラスの報酬提示を承認します」

平賀の言葉に続き、高橋女史が機械的な声音でそう告げた。
な、なんだ、いきなり俺の出番なのか？

「我らがDクラスは、Fクラスから試召戦争を宣戦布告を受けた。開戦は午後すぐ。君を雇いたい」
「な、相手はFクラス？　高橋先生、Fクラス代表からは何も無いんですか？」
「はい。Fクラス代表は今回はあなた――つまり《傭兵》を雇わないそうです」

その言葉を聞いて、なんだか早速力が抜けてきてしまった。
今更ようやく実感したが、クラス代表が望まない限り、俺は共に戦うことすら許されない。
すぅ、と。急激に心の内が冷めていくような気がした。

「それで、どうだろう。受けてくれるか？」

少しだけ心配そうな声音で、平賀が言う。
俺には一応拒否する権利もある。成績を手放すのを厭わなければ、だが。
これから幾度となく訪れるであろう試召戦争。その初戦が、雄二達の所属するFクラスを相手取らねばならない戦いになる。
若干後ろ髪を引かれる思いもあったが、それでも、経験は何物にも代えがたいはずだ。
だから俺は、若干の間を置いた後に頷いた。

「……受ける。Dクラスに所属しよう」
「ありがとう。念には念を入れておきたいんだ」

そう言って笑顔を見せた平賀が、右手を差し出してきた。
彼は慎重な性格のようだ。実力で勝るFクラスに対し《傭兵》を雇うのだから。
だが、それでも報酬としてプレートを提示され、それを受けた以

上俺は全力で戦わざるを得ない。
そうだ、俺が絶対に必要な人材だと思わせるため全力で戦えば――、実力を皆に示せば、きっと俺はFクラスと共に戦える。
今は敵だが、いずれやって来るであろうFクラスの重要な戦争、その時、胸を張って参加できるように今は実力を溜めるんだ。
平賀から差し出された手を、俺は力強く握った。
Fクラスは明久や雄二達、仲の良い友人達の所属するクラスだが、それでも手加減は……しない。

☆

「ねぇ雄二、雅臣を雇わなくてよかったの？」
「雅臣って、一条のこと？　そういえばGクラスって言ってたわね」
「雄二、あ奴はBクラス相当の力を持っているんじゃぞ？　ただでさえFクラスはDクラスに劣るというのに――」
「……無謀」
「いや、問題ない。あのプレートは本当に必要な時に使うべきだ。再支給はされないんだからな」
「今が必要な時じゃないの？」
「そうよ。Dクラスに負けたら元も子もないのに」
「まあ落ち着け、明久、島田。確かにDクラスに勝利しなければ俺たちに光も何も無いが、雅臣はこっちの切り札を知らないだろ？」
「姫路じゃの？　確かに、雅臣はその存在を知らんじゃろうな」
「……それだけ？」
「いや、こっちには雅臣との付き合いって武器がある」
「それってどういうこと？」
「……弱点？」
「そうだ。あいつの苦手な教科も、得意な教科も、俺たちは知って

る。だからDクラスに回られようと問題ない」
「そうか、勝手を知ってる敵ほど怖くないものはないもんね」
「なるほど……。上手く相手が苦手な教科で勝負を挑めばいいのね」
「その通りだ。雅臣は理数科目は得意だが、文系はからきしだ。そして姫路は全体的に文系の点数が高い」
「ふむ……、文系主体で攻めるのかのう？」
「平賀は多分近衛部隊に雅臣を置くだろう。姫路で奇襲をかける時に文系科目で攻めさせれば、一刀両断も可能だろうな」
「……なんだか可哀想」
「まあ仕方ない。ちゃんと次の試召戦争では味方について貰うさ」

☆

午後を迎え、Fクラス対Dクラスの開戦が差し迫った頃。
俺はDクラス本陣で、クラス代表である平賀の作戦に耳を傾けていた。
《傭兵》などという特殊な立場で試召戦争に臨む俺が物珍しいのか、Dクラスの面子が遠巻きに俺を見ているのが少し気になったが仕方ない。
俺は成績のため、そして自分自身の試召戦争のためにも、今は全力で戦いに集中するだけだ。
「いいか、Fクラスは我らDクラスには実力で劣る！　一対一なら負ける要素はどこにもない！　この戦争、絶対に勝つぞ！」
『おおーっ！』
平賀の作戦は至ってシンプル。こちらが実力で勝っているのだから、純粋に力押しでFクラスを相手本陣――つまりFクラスの教室

に押し込み、その後Dクラス戦力で一斉に強襲、敵総大将坂本雄二を討ち取る作戦だ。単純明快、上位クラス故に取ることの出来る戦法だが、果たしてそう簡単に上手く行くだろうか。そもそもFクラスは実力で劣るのだから、簡単には終わらせないための秘策を隠し持っている気がしてならない。

少し引っかかるから、俺も様子見で出て行った方が良いかもしれないな。

そう思ってクラス全員の前での演説を終えた平賀に話を持ちかけると、渋々ながらも了承された。

「一条は本陣の防衛について貰いたかったんだけどな」

「大丈夫、頃合いを見て退くさ」

「ん、わかった。だが無理はしないでくれよ」

「了解だ」

頷き、俺はDクラスの壁にかかった時計に目をやった。

試召戦争開始まで、あと三分。俺の初陣が、もうすぐ始まる。

目を閉じ、考えるのはFクラスの友人達。明久、雄二、秀吉、ムッツリーニ……。まさか初っ端からあいつらと敵対することになるとは思わなかったけど、それが《傭兵》である俺の運命（さだめ）なのかもしれない。

戦場で出会った時は容赦なく斬り捨てる。だから――覚悟しておいてくれよ。

俺の覚悟と共に、戦争の立会人である高橋女史の高らかな声が響き渡った。

『試召戦争、開始――！』

『うおおおおーっ！』

雄叫びと共に飛び出していくDクラス先鋒部隊。化学教諭の布施先生、五十嵐先生もそれに続く。Dクラスの狙いは、立会人を増やすことによる戦争の早期決着だ。

その人波に続き、俺も教室を出た。さあ、試召戦争の始まりだ！

『試獣（サモン）召喚―ッ！』

教室を飛び出したら、早速、Fクラスのある旧校舎へと続く渡り廊下から声が聞こえてきた。

試召戦争はテストの点数に応じた強さを持つ召喚獣を召喚し、戦わせる疑似戦争。『試獣召喚』は、その召喚獣を喚び出すための起動キーだ。

俺も掛け足で渡り廊下へと向かい、Fクラス先鋒部隊の面子に目をやった。

数人のFクラス先鋒部隊を率いているのは――、なるほど、秀吉か！

去年のクラスメイトの姿を見つけ、心が躍る。彼らといきなり刃を交えることになろうとは。

まずは様子見だ！　その実力、見せてもらうぞFクラス！

「Dクラス所属、一条雅臣が行きます！　試獣（サモン）召喚！」

俺の言葉に応じて、俺の足元に幾何学的な魔法陣が現われる。教師の立ち会いの下、試験召喚システムが起動されたのだ。

魔法陣が様々な光の帯を描き、一際明るく輝く。光が徐々に収束した後、それはやがて小柄なフォルムを形作り――、

「出たな、相棒！」

――俺の召喚獣がその姿を現した。

身長は８０センチ程度で、俺をデフォルメしたような外見を持つそいつは、胸部と腰部に最低限の鎧を纏い、両の手にそれぞれ同じ長さの両刃剣を持っていた。さながら二刀流の軽装騎士といったところか。

一年次から見慣れた相棒の背中は、実に頼もしく見える。

「くっ――、早速出てきおったか、雅臣！　試獣召喚（サモン）じゃ！」

苦々しげに、敵前線部隊司令官である木下秀吉（きのしたひでよし）が言った。どうでも良いが彼の外見はいつ見ても女にしか見えない。双子の姉がいるのだが、俺にはその区別がまるでつかなかった。

秀吉の言葉に反応し、魔法陣が彼の足元に現われる。試験獣による戦闘を挑まれた時――つまり今は俺が挑んだ形になるが――それを拒否したものは戦闘放棄と見なされ、戦死者同様の扱いがなされてしまう。戦死者は召喚獣の点数が０点になってしまった者のことを言い、その戦争を行っている間中、補習室送りにされてしまう。補習室は地獄だと聞くので、出来れば行きたくはないものだ。

なんて事を考えているうちに、秀吉の召喚獣が姿を現していた。デフォルメされた秀吉が袴を着て、薙刀を持っている姿は、何だかちまっこくて可愛らしい。

同時に、相対した俺たちの得点がその頭上に表示される。これが召喚獣の戦闘力となるのだ。

『Ｄクラス　一条雅臣　ｖｓ　Ｆクラス　木下秀吉』
『化学　　１８６点　ｖｓ　　７４点　　』

「ぐ……、流石は雅臣といった所じゃな……！」

俺との点数差に、秀吉が呻き声を上げた。
俺の得意科目は理数系。Dクラスが立会人として呼んできた化学担当の教諭は俺にとっておあつらえ向きのフィールドを作り出してくれる。

「さて、何を企んでいるかは知らないが、初めての試召戦争、頑張らせて貰うぜ！」
「あまり頑張っては貰いたくないものじゃのう……っ！」

召喚獣に、指示を飛ばす。まずは秀吉の召喚獣へと距離を詰める！
《特異点》故に召喚獣の扱いはお手の物だ。デフォルメされた俺は、特に労することもなく秀吉の召喚獣へと接近。そのまま右の剣を横薙ぎに払う。

「ぐうっ！」

秀吉の召喚獣が、何とかギリギリ柄でそれを受け止めた。
だがそれも予想の内、続けて左の剣を上段から振り下ろす。
薙刀で俺の片方の攻撃を受け止めていた秀吉は、武器を捨てることで俺の攻撃から何とか距離を取った。
だが、召喚獣との戦いの合間に武器を離してしまったのは失敗だ。
更なる追い打ちをかけるべく、俺の召喚獣が地を駆けた。勢いよく床を踏み抜き、軽く跳躍――、全身をバネにする勢いで力を溜めた二刀を――、振り切る！

「ちっ――！」

だが、迷いが生じたのか、俺の攻撃は急所に当たることなく秀吉の召喚獣の足や腕を掠めるに留まった。
友人をその手にかけることに躊躇いがあるらしい。だが、攻撃力

の差は大きく、秀吉の召喚獣の点数は限りなくゼロに近い。首の皮一枚で生きながらえている状態だ。
辺りを見回せば、Dクラスの他の面子はFクラスとの勝負に手一杯で、秀吉に手を下せる暇がある奴はいないようだ。
好都合だな。

「退け、秀吉。出来ることなら、手をかけたくはない」
「く……、余裕じゃの、雅臣……」
「いや、まあ、なんか女子を虐めてるような罪悪感が……」
「ワシは男じゃぞ！？」

ここまで説得力がない言葉も珍しいと思うけど。

「まあ、召喚獣の扱いには慣れてるからな。突撃、回避、単調な動きをされてるだけじゃ負ける気はしないよ」
「く、仕方ない。今は退こう！　皆、点数を消耗している者は本陣にて点数補充じゃ！　中堅部隊の明久達と入れ替わるように撤退するのじゃ！」

秀吉の撤退命令が下る。それを耳にしたDクラスメンバーの士気は高揚したようで、後退するFクラス先鋒部隊に追いすがるべく追撃を開始した。

「よし、追え！　一人たりとて逃がすな！」

Dクラス先鋒部隊の隊長、塚本がよく通る声で命令した。この戦場で、声が大きいことは大きな武器になるだろう。
やるべき事がはっきり見えてくれば迷いが無くなり、無駄な動きが無くなる。
とりあえずまともな動きが出来ることは確認できたので、俺は平

賀を安心させるべく一旦本陣へ帰還することにした。
振り返る前に、こちらへ駆けてくる明久と、島田美波（しまだ みなみ）――同じく去年のクラスメイトの姿が見えた。彼らとの勝負は、まだお預けだな。

『ふふっ。お姉さま、この時間ならベッドは空いていますからね』
『よ、吉井、早くフォローを！　なんだか今のウチは補習室行きよりも危険な状況にいる気がするの！』

教室に入る前、背後から聞こえてきた台詞は何だかとっても……薄ら寒かった。

☆

「前線部隊が攻めあぐねているみたいだな」
「ああ。Ｆクラスの奴ら、予想以上に粘るな」

本陣へと帰還した俺は、特に点数が減っているわけでもなかったので補充試験を受けることはせず、クラスの頭である平賀と現在の戦況について話し合っていた。
時々斥候から伝えられる情報によれば、明久が率いる中堅部隊は多対一の状況に持ち込んで戦線を維持しているらしい。
攻めてくるというよりは何かを待っているといった風だが、目的は何なのだろう。

「不気味だな……。こっちとしては早く決着をつけたい。数学の木内先生を呼んできてくれ」
「わかった」

側にいた生徒に、平賀が告げる。
その言葉に頷いて教室を出て行った彼の背中を目で追いつつ、俺は平賀に言った。

「もう一度出ようかと思う」
「だが、相手が何かを隠しているかも知れない以上、あまり点数を減らされても困るぞ？」
「まあ、確かにそうだが、何かを隠しているからこそ俺が出て揺さぶりをかける手もあるだろ」

俺の言葉に、平賀はうぅむ、と考え込むように唸った。
なかなか慎重だが、決断力がないと言い換えることも出来るだろう。
俺がそんな風に勝手な判断を下していると、再度斥候からの情報が入った。

「代表、Ｆクラスに世界史の田中が呼び出されたらしい！」
「なに！？」
「Ｆクラスはやっぱり何か隠してるな。持久戦に持ち込む気だぞ」
「く……」

その顔を歪め、平賀が思案する。そして数秒の間の後に、平賀は俺への命令を下した。

「一条、頼む」

「任せろ！」

言われるよりも早い勢いで、俺は教室を飛び出した。

渡り廊下に向かいながら、Ｄクラスの連中に先ほど斥候からが得てきた情報を伝える。

Ｆクラスの目的は持久戦――、敵クラスに何か隠し球があり、と。

また、とっととケリをつけるために数学の船越先生を呼んでくるようにも頼んだ。

途中何度かＤクラスの生徒と入れ違いになりながらも、渡り廊下の入り口へと辿り着く。

「みんな、何とか持ちこたえるんだ！　前線を下げちゃダメだよ！」

『応！』

渡り廊下、ＤクラスとＦクラスの交戦地帯のまっただ中に、明久はいた。

皆に的確に指示を飛ばし、前線を保たせるその手腕。雄二には劣るかも知れないが、統率は取れている。

俺は笑みを浮かべ、混沌を極める混戦地帯に飛び込んだ。

「試獣召喚！」

早速召喚獣を喚び出す。立ち会い教師は布施先生、召喚獣を出している相手は二人だ。

押され気味だった自軍生徒と入れ替わるように、俺はその体を滑り込ませた。

「くっ、新手か……！」

「またか……げぇっ！」

『Ｄクラス　一条　ｖｓ　Ｆクラス　工藤・森川』
『化学　１８６点　ｖｓ　５５点・４３点』

俺の召喚獣が再度姿を現し、Ｆクラス二人を相手取る。
敵二人は俺との戦力差に愕然としたのか、召喚獣に指示を飛ばすことなく呆然と立っているだけだった。
これ幸いとばかりに、二体を同時に切り刻む。直後、二人の召喚獣の頭上に表示されていた点数が０点になり、どこからともなく現われた西村教諭によって二人は補習室へと連れ去られて行ってしまった。一瞬の出来事。
現実は非情なり。

「っと、後数人だな……。明久と勝負でもさせて貰うか」

相手の数は着実に減ってきている。俺は中央で指示を飛ばす明久の元へ駆け出した。
点数が減っているＤクラスメンバーは本陣へ帰したが、それでも優位は変わらない。このままだったら相手の切り札が出る前に押し切ることも可能だろう。
さっきは秀吉に対して非情になりきれなかったが、今度こそは。

「明久！」
「ま、雅臣！？」
「明久、勝負だ！　試獣召――」

ピンポンパンポーン《連絡いたします》

突如響き渡る校内放送。思わず戦闘中の皆が手を止める。

《船越先生、船越先生》

その単語が聞こえた直後、明久の顔が喜色に彩られた。

やられた――！　俺たちが船越先生を呼ぶ前に、別の場所へ誘導しようという魂胆か！

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

あ、明久が固まった。

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

な、なんということを……！　明久の指示で放送を流したのかはわからないが、もしそうであるならば俺は明久を尊敬せざるを得ない。

何せあの船越女史と言えば婚期を逃したが故に単位をチラつかせて生徒との交際を迫る超極悪教師……！　確かにこの放送は彼女にとっては効果抜群だろう。ただし明久の命と引き替えになるが。

放送を聞いた敵先鋒部隊の面々が、明久に握手を求めている。ああ、彼は勇者だ。紛う事なき勇者だ……！

対してこちらの陣営は数で勝っているにもかかわらず、敵の捨て身の行動に若干士気が揺らいでしまっていた。

敵軍は士気が高揚している今が攻め時、俺たちはおそらく押され気味になる。そんな時に雄二達の本隊と合流された日には目も当てられない状況になるのは確かだ。

ならば――！

「明久――、お前には敬意を表するが、行くぞ！」

――その前に頭を潰す！

「く、不味い……！」

『明久、あと少し持ちこたえろ！』

突如、聞こえた声。敵軍――雄二達の本隊か！　最早俺たちに迷っている暇はない！

「Dクラス！　今が正念場だ！　本隊合流前に敵先鋒部隊を殲滅させろ！　戦死は厭うな！　ここでやらねば、勝利はないぞ！　敵隊長は俺がやる！　全軍突撃！」

『お、おおおーっ！』

俺の檄に、Dクラス先鋒部隊が威勢の良い声を上げた。塚本の見せ場を取ってしまったような気がするが……、まあいいか。

明久はどうやら召喚を躊躇っているらしい。雄二達本隊の到着まで粘りたいのが本心だろうが、そうはさせるものか。

「五十嵐先生、Dクラス鈴木が召喚を行います！」

「負けるか！　Fクラス田中も行きます！」

相手は残り四人。

だが、鈴木の召喚獣が刀で田中を討ち取り、残り三人になる。

その鈴木も点数が減ったため、敵軍にやられて戦死。だが、Dクラスは更に間断なく攻めていく！

「先生、Dクラス笹島圭吾行きます！　試獣召喚！」

鈴木を打ち破った敵を討ち取った笹島が、明久目掛けて突っ込ん

でいく。
だが、笹島の点数は低いし、何より明久は《観察処分者》だ。笹島に勝機があるとは思えない。

「笹島、下がれ！　俺が出る！」
「げ、雅臣！？」
「行くぞ――、試獣召喚！」

明久は逃げられない位置にいる。彼には召喚以外の選択肢が残されていない！

「明久、その首級（くび）貰い受けたぞ！」

第三問

「はあああああっ！」

声と共に、俺の召喚獣が明久目掛けて疾駆を開始する。

逃げ場の無くなった明久は渋々ながらも召喚獣を召喚、渡り廊下の中央で俺との交戦状態に突入した。

軽やかに床を駆け、まずは横薙ぎに一閃。時間差でさらに一閃を繰り出す。

「くっ、慣れてるだけあるよ……！」

改造学ランに木刀を携えた不良スタイルが印象的な明久の召喚獣は俺の攻撃を見越し、前方に転がった。その直後、俺の召喚獣の二刀が空を斬り裂く。そのままの勢いを殺さずに、身体を反転させてもう一撃！

明久の召喚獣は、四つん這いの状態から更に姿勢を低くすることでどうにか俺の攻撃を躱した。両者は、一旦距離を置く。

普通の生徒だったら最初の攻撃かあるいは二度目の攻撃で戦死扱いになるところなのだが、流石は《観察処分者》だけあって召喚獣の扱いには慣れているようだ。

《観察処分者》は、学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられるバカの代名詞で、特例として物に触れられるようになった召喚獣（本来ならば物に触れることは出来ない）を使って、教師の雑用係をやらされるという、大変不名誉な称号だ。文月学園開設以来初の《観察処分者》がこの明久で、彼は俺とはまだ違うベクトルでさんざこき使われているため、召喚獣の扱いに慣れている。

普通の生徒なら突撃、回避など大雑把な命令を下すことしかでき

ないが、明久は前方に転がるようにして回避、その後に姿勢を低くして剣撃を避けるといった細かい行動を難なく行った。《観察処分者》の強みは、召喚獣の扱いに慣れていること、そこにある。
だがそれは、《特異点》として召喚獣の研究に付き合わされてきた俺とて同じ事。
つまりこれは、純粋に力勝負――点数の勝負になる。

「明久、雄二達の本隊が来る前にお前を潰して、士気高揚を図らせて貰う！」
「そうはさせないよっ！」

再び、俺の召喚獣が明久の召喚獣へと向かっていく。明久は点数差を考え回避に専念することにしたようで、木刀を体の中心に構えながらこちらの攻撃をいなそうとタイミングを見計らっているのがわかった。賢明な判断だろう。

「おおおおっ！」

叫び、左の剣で切り払う。木刀で弾かれるが、構わず右の剣を突き出す。
明久の召喚獣は俺の攻撃を半歩体をずらすことで避けたが、体勢が少し崩れた。そこを見逃さず、下段から蹴りをその腹にぶち込む。武器での攻撃ではないので点数はあまり削れないが、それでも十分な攻撃力だ。明久の召喚獣は軽く吹っ飛び、当の本人も辛そうな顔で腹を押さえていた。
そうだ、失念していた。《観察処分者》は、召喚獣の痛みや疲労が生身の体にフィードバックするのだ。

「良い蹴りだね……雅臣。腹が抉られたみたいだよ」
「悪いな。フィードバックするのを忘れてた」

「だと思ったよ。でも、それで手加減してくれるほど甘くはないんでしょ？」

当然。俺が頷くと、明久も笑みを返した。

二刀を構え、敵との距離を測る。明久の召喚獣とは再度距離を取られてしまったため、走り寄っても攻撃を避けられるのがオチだろう。背後に見える雄二達Ｆクラス本隊も段々と近づいてきた。冷静に考えて、ここで勝負を決めるのは無理か。

「もうすぐ雄二達の本隊が来るよ、雅臣」

「ああ、そうだな。とっととケリをつけたかったが仕方ない……、勝負は持ち越しだ」

「そうだね。そうさせてもらうよ」

言って、振り返った明久は背後の本隊との距離を測った。

まだ交戦中のＤクラス部隊に素早く目を走らせ、叫ぶ。

「ああっ！　霧島さんのスカートが捲れているっ！」

『なにいっ！？』

俺と明久を除く、その場にいたほぼ全員が背後を振り返り、新校舎側を見つめた。その隙に上靴を脱いだ明久が、近くの窓にそれを思い切り投げつけた。割れるガラスに驚いた皆の注意が更に逸れる。

「うわっ！　島田さん！　そんな物をどうする気だよっ！」

白々しい台詞を叫びながら、壁に備え付けの消火器をぶちまける明久。皆の視界が遮られる。

さらにその隙に、消化器をスプリンクラーにでもぶつけて視界を再度確保、その時には既にＦクラス本隊が合流しているといった作

戦だろう。
だが！
「明久！　覚悟！」
「えっ、雅臣！？　勝負は持ち越しって……」
「んなもん信用するなよ」

俺の召喚獣は、逃げようとする明久の召喚獣に対して攻撃を繰り出していた。
そりゃこれだけ冷静に事態を把握していたのだから、追いすがることくらい容易に判断できると思うのだが。

「な、何で注意が逸れてないのさ！？」
「白々しすぎるだろ！　学園一のクールビューティー霧島翔子のスカートが万が一にでも捲れることがあると思うか！？　いや、ないね！」
「くっ、流石はクールビューティー好きの雅臣だよ！　だけど、こっちはもう合流完了だ！　逃げさせて貰うよ！」
「待たせたな、吉井！　五十嵐先生、Ｆクラス、近藤吉宗が行きます！」

Ｆクラス本隊登場。吉井の召喚獣を庇うように立ち塞がった彼を、ただ一刀のもとに斬り捨てる。

「ぐわああ！」
「ああっ、近藤君が！」
『近藤ーっ！』

登場して即退場という酷い目にあってしまった（俺のせいだが）
近藤にＦクラスの面子が気を取られている隙に、俺は声を張り上げ

Dクラスのメンバーに指示を下した。

「Dクラス！　Fクラス本隊は俺が抑える！　点数が減っている者はまずは撤退！　その後本隊を出せ！」

『了解だ！』

俺の戦い振りを見ていてくれたのか、素直に返してくれるDクラスメンバー。

試召戦争はこうやって仲間内での信頼関係を築くという面ではおあつらえ向きの題材なのかも知れない。

「敵は一人か？　だったらぶちのめした後に明久の部隊を回収、一旦戻るぞ」

敵総大将、雄二の声が響く。多分Dクラス本隊が出張るのを嫌がったんだろう。そうでなければ嬉々として追撃するタイプの人間だ。

しかし、雄二はここに残っているのが俺だとは気付いていないらしい。気付いてくれた後の反応が見物だ。

「よし、敵は一人だな！　全員で囲ん――」

「よ、雄二」

「――よし、退け！」

雄二の迷いのない命令に、Fクラスメンバーが退却を開始する。俺が《特異点》であることは、知っている者にとってはそこそこの威力を持つということが証明された。まあ、単純な攻撃しか繰り出せない召喚獣でいくら取り囲んだとしても、ちょこまか動き回る俺の召喚獣の相手は出来ないという判断なのだろう。賢明だ。

Fクラスが退却したのを見届けて、俺も悠々と自軍へ帰還した。追撃する手もあったが、Fクラスには何か切り札があるはずなので、

深追いは逆に危険だ。
Dクラスの本陣に戻ると、平賀が残存勢力を纏めている場面に出くわした。

「一条、無事だったか」
「ああ。残り兵力はどんなもんだ？」
「半分と少しかな。もうすぐ他クラスが下校するところだろうし、早めに勝負を決めたいところだ」

言われてみれば、確かに戦争が開始してからそこそこの時間が経っていた。集中すると時間の流れるのは早い物だ。
俺は平賀の近衛部隊に就く旨を伝えると、明久との戦いで少し減った化学の得点を補充するための試験を受験した。

☆

「偵察部隊より連絡、敵クラスが進軍を開始！　総攻撃を仕掛ける模様！」
「よし、先鋒部隊出撃！」

平賀の命令で、補充試験を終えたDクラス先鋒部隊が教室を飛び出していく。
下校する生徒達も混じる廊下で、Fクラス対Dクラスの試召戦争はいよいよ最終局面へ突入しようとしていた。
総攻撃を仕掛けると言っても、FクラスにDクラスへ太刀打ちできるだけの実力はないはずだが、そこのところはどうするつもりなのだろう。
なんて事を考えているうちに、先鋒部隊の数人がほうほうの体で

逃げ帰ってきた。
「まずい、Ｆクラスは下校中の生徒に混じって勝負を仕掛けてくる！」
「塚本が討ち取られたぞ！」
その報告に、Ｄクラスが動揺する。俺は舌打ちし、この作戦の立案者――野性味溢れるあの男の顔を思い浮かべた。
「……雄二の考えそうなことだな」
人混みに紛れ、数人で一人を囲んだところで勝負を挑む。攻撃力で劣るＦクラスがＤクラスに対抗するためのゲリラ的作戦だ。
雄二のことだから何も考えていないわけはないと思ったが、まさか下校中の生徒――つまりこの環境まで利用するとは。
「……いや、時間稼ぎはこれが目的だったのか？　でも、本隊が出てきたら為す術が無いような……」
「何でも良いけど、仲間がやられているのを見捨てるわけにはいかないな！　Ｄクラス本隊、出る！」
『おおおーっ！』
うん、今はこっちが重要だ。
でも……、妙に引っかかる。ゲリラ作戦だけで、ＦクラスがＤクラスを圧倒することが出来るとは思えないのだが。雄二の奴、まだ何かを隠しているような気がするな。
「気にしてても仕方ないか……」
「一条。一条は俺の近くで囲まれてる仲間の救援に向かってくれ」
「了解」

Ｄクラス本隊が教室を飛び出す。それに混じって外に出た俺も、平賀からそう遠くない位置を取りながらＦクラスに急襲されている味方の救援に走った。
背後から、平賀の声が聞こえる。
「本隊の半分はＦクラス代表坂本雄二を獲りに行け！　他のメンバーは囲まれている奴を助けるんだ！」
『おおー！』
平賀の号令の元、新校舎側まで差し迫っていた雄二が一斉にＤクラスの面子に取り囲まれた。あいつの周りにもＦクラス本隊がいるから簡単にやられはしないだろうが、きつい状況であるのに変わりはない。
「Ｆクラスは全員一度撤退しろ！　人混みに紛れて攪乱するんだ！」
「逃がすな！　個人同士の戦いになれば負けはない！　追い詰めて討ち取るんだ！」
よく通る声で、雄二が命令する。それに続けて叫ぶ平賀。
こちらの本隊は分散し、Ｆクラスメンバーの追討にかかっているようだ。平賀の防備が少々薄くなるが、近衛部隊が数人周りを警戒しながら歩いているので問題はないだろう。流石にＦクラスもその程度は弁えているようで、無理に隠れて平賀を狙うような輩は――、
「向井先生、Ｆクラス吉井が――」
「Ｄクラス玉野美紀、試獣召喚」
「なっ！　近衛部隊！？」
――いたみたいだ。

人混みに紛れて平賀へと近づいていた明久だったが、近衛部隊の玉野に遮られて歯軋りしている。
明久とは俺が勝負をつけたいな、などと呑気なことを考えながら彼らに近づいている俺だったが、瞬間、何だか妙な姿を発見した。
色素の薄い髪に、発育の良い身体。おっとりとした雰囲気が人気のあの少女は――姫路瑞希（ひめじ みずき）だ。霧島翔子に続く才女、おそらく学年次席である彼女がこの渡り廊下に足を向けているのは何故だ？　彼そして何故、彼女はその足を平賀の方へと向けている？
嫌な予感が、脳裏を駆け抜けた。

「それは同感。確かに僕には無理だろうね。だから――姫路さん、よろしくね」

明久の声。予感は確信へ変わる。まずい、姫路瑞希はFクラス所属だ！
何故彼女が学年最低のクラスに所属しているのかわからないけれど、とにかく、姫路瑞希は敵だ！
だが、それに気付いていない平賀は明久の言葉にワケのわからないと言った表情を見せている。

「え？　あ、姫路さん。どうしたの？　Aクラスはこの廊下は通らなかったと思うけど」

平賀の疑問も当然だ！　誰だって、姫路瑞希がFクラス所属だとは夢にも思うまい！
俺は駆けだした。平賀が姫路からの宣戦布告を受ける前に何とかして彼女と相対せねばならない。
代表を討ち取られれば、そのクラスは敗北することになる。つま

りDクラスの敗北だ――！

そうはさせるか――！

「いえ、そうじゃなくて……」

「？」

「Fクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしくお願いします」

「あ、こちらこそ」

「その……Dクラス平賀く――」

「――Dクラス一条雅臣！　姫路瑞希さんとの勝負を受けます！」

「雅臣！？」「一条！？」

明久と、平賀の驚いたような声。

間に合った。ギリギリで体を滑り込ませ、何とか平賀が姫路を相手取る前にその矛先をこちらへ向けることに成功した。

立会人の竹内先生を見れば、問題ないと言ったように頷いている。ならば躊躇うことはない！

「姫路、勝負だ！　試獣召喚！」

「あ、えと、その、さ、試獣召喚ですっ」

……ん？　竹内先生……？

……。……、竹内先生の担当って、なんだっけ？

『Ｆクラス　姫路瑞希　ｖｓ　Ｄクラス　一条雅臣』
『現代国語　３３９点　　３９点』

ああ、現代国語か……。

……。

俺の召喚獣は何とか逃げ回ったものの、姫路の召喚獣に圧倒的な力量差を持って討ち取られあえなく戦死。

正気を取り戻した平賀も、時既に遅く、姫路の召喚獣に一撃の下に斬り捨てられてしまった。

こうして、ＤクラスはＦクラスに敗北。

俺の初めての試召戦争、そして《傭兵》生活は、黒星で終わってしまった。

第四問

勝ち鬨を上げるFクラス。それに対し、意気消沈といった体のDクラス。

無理もない。格下だと見下していたクラスに敗北してしまったのだから。

敗北の原因は相手の力量を軽視しすぎたことと、攻めきれなかったことだろうか。

いや、それもあるけど何よりも大きな問題は、俺が《傭兵》としての仕事をきちんと果たせなかったことか。友人――秀吉や明久、雄二らに対して攻撃の手が鈍ってしまったこと。それが結果的にDクラスの敗北を招いたと言っても過言ではない。そして、最後の対姫路戦。姫路の存在を事前に察知することが出来ていれば、対策を練ることは可能だったろう。科目を理系科目に換え、俺が一撃一撃丁寧に攻撃を喰らわせていく戦法を取れば、時間はかかるが彼女を討ち取ることだって出来ない話じゃなかった。全てはたらればの話になってしまうが、俺は相手が何かを隠していると思いながらも何一つ行動を起こそうとしていなかったのだ。全てはそこに原因がある。

「くそ……っ」

悔しい。すごく、悔しかった。

自分のミスが、一時的なものとはいえ仲間になった皆を苦しめる結果を招いてしまったのだ。ぎゅっと握った拳に力が入る。

次は、次こそ俺は所属クラスを勝利に導いてやる。それが、《傭兵》としての俺の仕事なんだ。

「一条……、負けたな」

「平賀。……すまん。俺が《傭兵》の仕事を果たせなかったばっかりに」
「いや、気にするな。一条はよくやってくれたさ」
そう笑いかけてくれる平賀に、俺は返す言葉を見つけることが出来なかった。
平賀はこれから敗残の将として、クラス内で辛い扱いを受けることになるのだろう。その責任の一端を俺が担っていると思うと、俺は申し訳なくていたたまれない気持ちになる。
「Dクラスのみんなも、お前に感謝こそすれ、恨みはしないよ」
「だけど、俺がもっとしっかりとしていれば」
「いや、これは純粋に俺たちDクラスの慢心が招いた結果なんだ。自業自得って奴だな」
そう言って、平賀は遠い目をしながら勝利の美酒に酔いしれる明久達Fクラス主要メンバーに視線を向けた。
明久が雄二に手首を捻られ、周りで他の面子がそれを見て笑っている。本当だったら、平賀達があの光景を体現していなければならなかったのに。
「もういいんだよ、一条。気にするな」
「でも……いや、《傭兵》という立場になった以上、俺は雇われた側に勝利をもたらす義務があるんだ。今、改めてそう思った」
プレートは報酬。俺の成績になるが、俺は望まれてこの陣営に着いたのだ。
そう、誰かが必要としたから、俺は戦っている。ならば、その俺が勝利に貢献できなくてどうするというんだ。

「そんな難しく考える事じゃないと思うけどな」
「……そうなのかもしれない。だけど、俺は望まれて一緒に戦ったんだ。期待に応えられないのは悔しいし、情けない」
「一条、お前の責任感の強さはすごいと思う。だけど、そんなに自分を追い詰めたって良いことは何も無いぞ」
「……」
「結果はどうあれ、俺はお前を雇って良かったと思うよ。ありがとう」

差し出された手。
俺は、力なくその右手を握った。
心の中で、平賀にずっと詫びながら。

「しかし……まさか姫路さんがFクラスだなんて、信じられん」

言いながら、平賀がFクラスメンバーの元へと向かっていく。
これから勝者側と敗者側の間で戦後交渉を始めるのだろう。下位クラスが上位クラスに勝利した場合、その設備ランクは入れ替わることになっている。つまり、Dクラスはちゃぶ台と座布団で授業を受けることになってしまうのだ。平賀がどれだけ庇ってくれたところで、迷惑をかけてしまうことに変わりはない。俺は交渉を開始した平賀の背中を見ていられなくなり、Dクラスへと引き返した。
Dクラスの皆が俺を糾弾するのなら、してくれればいいと思う。平賀だけの責任じゃない、その事さえ伝えられれば――。

「よ、お疲れ」
「お疲れ様、一条くん」
「格好良かったよ、前線で戦ってる姿」

憂鬱な気持ちでDクラスの扉を開いた俺を待っていたのは、間断

なく浴びせられる罵倒の言葉――ではなく、ただ今日の戦闘を労う暖かい言葉たちだった。正直名も知らない生徒たちが次々にやってきて、笑顔で肩を叩いていく。「お疲れ」「負けたけど仕方ないな」「ちゃぶ台は勘弁して貰いたいけどな」などと、敗北はしてしまったが、それをしっかりと受け止め前を向いているDクラスの面々に、俺は面食らってしまった。

「お前ら、俺を責めないのか？」
「何で責める必要があるんだよ」
「もしかして一条くんってそういう趣味？」
「顔は良いのに勿体ない。……いやむしろそれはそれで」

俺の言葉に、さも不思議そうな顔で受け答えするDクラスの生徒たち。本当にワケがわからない。

「一条はGクラスって言ってたよな？」
「え、ああ……まあ……」
「だから俺たちとは縁もゆかりもない別クラスのメンバーだ。でも、お前はDクラスのためにちゃんと戦ってくれてただろ？」
「そうそう。私、一条くんのお陰で戦死を免れたんだから」

そう言って、その女子はにこりと笑顔を返してくれた。全然覚えていないが、そういうこともあったのだろう。Dクラスの面々は、口々に思い思いの言葉を語る。

「Fクラスに負けたのは屈辱だけど、まあ結構面白かったよな」
「うんうん。始業式にいきなり挑まれるとは思ってなかったけど」
「これで三ヶ月間勝負は挑めないのか……、残念と言えば残念だな」

誰も、俺を責めはしなかった。ただ、労い、仲間として認めてく

れていた。
不覚にも、じんわりと目頭が熱くなったような感覚に囚われる。
「あ、おい！　一条の奴泣いてるぞ」
「い、いや、泣いてないぞ！？　これは色々と。その……」
「一条、また戦争があった時はDに来いよな」
「歓迎するからね」
「吉井くんと仲が良いみたいだから、応援してるね！」
ちょっと待て最後の台詞はおかしい。
だけど、Dクラスみんなの思いやりはすごく暖かかった。
戦争には負けてしまったが、俺は彼らの仲間として戦えて良かったと思う。
「ありがとう。みんな……」
だから俺は、精一杯の笑みをみんなに返した。
Gクラス、《傭兵》。特殊な俺でも、皆と打ち解けられる場所はあるんだな。
「おい、みんな、朗報だ！」
そんな折、ドアを開けて飛び込んできたのは先ほどまで雄二と交渉を行っていた平賀だった。負けたというのに何故か笑顔を見せている。何かあったのだろうか。
「Fクラス代表の坂本と交渉の結果、クラス間の設備入れ替えはナシだ！　加えて和平扱いで終了したため、宣戦布告権剥奪もナシ！」
『おおおーっ！』

平賀の告げた内容に、Ｄクラス全体が湧いた。設備は入れ換わることもなく、敗北扱いにもならない。
こんな良い条件はない。皆が興奮するのも無理はなかった。
だけど――。

「雄二が何の利も無しにそんな条件を呑むか……？」
「ああ、それもそうだ。交換条件に、俺たちは坂本の指示したタイミングであれを壊すことになった」

そう言って平賀が指し示したのは、Ｄクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。ただしあれはＤクラスのものではなく、隣のＢクラスのものだ。
あれを壊す……。なにか作戦に必要なのだろうか。

「とにかく、上手いこと事故に見せかければ問題はない。俺たちの教室はそのままだ！」
『おおーっ！』
「みんな、試召戦争ご苦労だった！　今日は敗北したが……次に戦争を仕掛ける際は、必ず勝つぞ！」
『おおおーっ！』

盛り上がるＤクラス。その輪の中に入っていられる俺は、なんて幸せなんだろうと思った。
次はどこの陣営に所属することになるのかわからない。それでも、俺は全力を尽くし、《傭兵》として、必ず所属クラスに勝利をもたらしてやる。

☆

Gクラスに戻って鞄を手に取った俺は、一人のんびりと校舎を後にした。
Fクラスでは今日の戦闘でお世話になった姫路が何かしていたような気がしたが、女子について詮索するのも憚られたので特に何もせずそのままスルーした。
玄関を出て、桜並木に彩られた舗装路を歩く。今日はたった一人のGクラス所属になり、試召戦争をいきなり経験し、そして敗北した。随分と色々起こった日だなあと感慨深く考えていると、目の前、校門先に見知った背中を二つ発見した。
二人とも同じ中学校だった男女二人だ。俺は思わず声をかけていた。

「よう、根本（ねもと）、小山（こやま）」
「ん？　なんだ、一条か」
「……あら、奇遇ね。一条」

興味なさげにこちらに視線をやった男は、根本恭二（ねもときょうじ）。同じ中学校出身の男で、結構つきあいがあった。一年の時はクラスが離れたのと彼自身の噂からか会話をする機会がぐんと減ってしまったが、友人であることに変わりはない。対して女の方は小山友香（こやまゆうか）。同じく中学校は同じ出身で、鋭い目つきとショートカットが印象的なバレー部のホープだ。
一応俺の幼馴染みなのだが、彼女が根本と交際を始めてからは距離を置くようになった。邪魔したら悪いし。

「元気そうで何よりだな。お前らクラスはどうなったんだ？」
「俺はBの代表。友香はCの代表だ」
「へぇ。二人とも頭良いな」
「聞いたぜ、お前はGクラスなんだってな？」

ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべながら根本が言う。こいつ、絶対Gクラスが学力低いと思ってやがるな。

「そ、Gクラス。《傭兵》役として試召戦争に参加いたしますので何とぞご贔屓に」

「今日も早速廊下で戦ってたわね」

「あ、見てたのか」

「……別に、視界に入っただけよ」

小山は随分と俺に手厳しい。幼馴染み故の冷たさなのか、純粋な嫌悪なのかわからないのが寂しいところだ。

思えば名前で呼んでいた頃もあったのにいつの間にか苗字で呼び合うようになっていたし、男女の幼馴染みなんてそういうものなのかも知れないな。

「ま、いいや。じゃあな二人とも」

「……そうね。じゃあね、根本クン」

「ああ、じゃあな」

ずっと邪魔するのも悪いので俺は二人と別れて歩き出す。

と、隣に小山が並んだ。あれぇー？

「おい、俺の気遣いを無駄にするつもりか」

「気遣い？　余計なお世話の間違いじゃないの」

「……あのなあ」

本当、小山は俺には手厳しい。

他の面子にはある程度友好的な態度を取っているのに、俺にだけこの態度ってのは相当嫌われてる証だろうか。

幼馴染みってその関係を続けていくのは難しいもんなんだなあ……。

家は隣同士だったりするので、帰り道は同じ道を歩いていくことになる。

二人並んで、夕暮れの町を無言で歩く。……すごい居心地悪い。

「……一条、Gクラスになったんでしょ？」

「え？　ああ、うん。そう」

「このプレートで、雇うらしいじゃない」

そう言って小山が制服の上ポケットから取り出したのは、甲乙丙三種のプレート。

クラス代表だから所持しているのだろう。

「ま、機会があったら雇わせて貰うわ」

「そっか。……もしその時が来たら、俺は必ず勝利に貢献するよ」

「いきなり、何？」

「いや、今日Dクラスに所属して、それで負けたんだけど……、俺は望まれて参加する以上、必ずそのクラスの勝利に貢献しないといけないなって」

「……そう。期待は、あまりしないでおくわ」

ひでぇ。

そして再度無言タイム。いたたまれない。

「えーと、小山？」

「何」

「……一緒に帰るのって、久しぶりですね」

「そうね。私が根本クンと付き合いだした頃から長い事一緒に帰っ

てないわね。それが何か？」
「……イエナンデモナイデス」
怖いよー。小山さん怖いー。
「そういえば昔は名前で呼んでたよな？　友香とか雅臣とか」
「……それが何か？」
「いえ、何でもないです」
「……」
「……あのー」
「今度は何」
「こ、小山って根本がタイプなのか？」
「……だからいきなり何なの？」
「い、一応参考程度に」
「何の参考よ」
「……いや、それはそのー。えーと」
「……」
「ごめんなさい、あまりの沈黙にいたたまれなくなって！」
「……ふぅん。まあ、どうでも良いけどね」
そう言って、小山はスタスタと歩いていく。
久しぶりの幼馴染みとの会話なのだから、もう少し持たせたかった所なんだけど、無理か。
この後一切会話を交わすことなく、俺と小山は帰路に着いた。
学園で会った時、気まずいんだろうなあ……。
これからのことを考え、俺は嘆息した。考えることはまだまだたくさんありそうだ。

第四問（後書き）

ようやくDクラス戦終了ー……。
そして根本くんと小山さんに捏造設定の危機！
まあ二次創作なんで大丈夫でしょう！　それでは

第五問

Ｄクラスに所属しての試召戦争が終わって、翌日。
隣のＦクラスは消費した点数の補給のため一日テスト漬けだと朝方鉢合わせた雄二が言っていた。
しかし俺はＧクラス所属。特に何もやることがなく、朝のＨＲ――と言っても先生は来ないのだが――の開始を待っていた。
畳の上で胡座を掻きながら、昨日のことを思い返す。
昨日は俺の責任――だけでないとＤクラスの皆は言ってくれたが、それでもまだ割り切れない――で敗北してしまったが、次回はどのように戦えばいいのだろう。
昨日の教訓を活かすのであれば、まず誰が相手でも攻撃を躊躇わないことが第一に挙げられるか。
続いて部隊の頭を出来るだけ素早く潰すこと。相手が何か切り札を切る前に勝負をつけるためにも重要だ。
後は、苦手教科と得意教科の差を出来るだけ縮めること。
昨日姫路に惨敗したのは、俺の苦手科目を雄二達に知られていたのが原因でもある。
さし当たって意識改善に努めるべきはこの三つか。けど……文系科目は苦手なんだよなあ。

「まあ……少しずつやってくしかないか」

憂鬱だが仕方ない。
これも《傭兵》になってしまった俺に課せられた一つの試練だと思おう。
とはいえ、俺の文系科目の悲惨さはＦクラス相当なのでそう簡単に改善できるとも思えないけど……。

《二年G組、一条雅臣。学園長がお呼びです。学園長室までお越し下さい》

と、そこで校内放送が入った。

ババァのお呼び出しか……。面倒だがこれのために俺はGクラスという面倒なクラスに隔離されてしまっているのだから仕方ないか。

さっきから仕方ないだの何だの妥協することばっかりだなあ、とちょっと落ち込みながら、俺は立ち上がった。

廊下でFクラス教室からもの凄い勢いで逃げていった明久の背中が見えたが、あれは何があったのだろう。

☆

「で、何の用ですかババァ長」

「いきなりご挨拶だねクソジャリ。昨日は早速《傭兵》をやってたそうじゃないか」

机に頬杖をつきながら、妖怪白ばんば――もといクソババァ、さらにもとい学園長である藤堂カヲルが言った。俺の態度も悪いと思うがこのババァの態度も相当のものだと思う。

「ババァの耳にも届きましたか。まだ耳はボケてはないみたいですね」

「他の部分がボケてるみたいな言い方だね」

「そりゃまあ……」

「何がそりゃまあだいこのクソガキ。とっとと実験に移るよ」
「へーい」

生返事を返し、俺は力なく「試獣召喚（サモン）」と呟いた。直後、俺の足元に浮かび上がる光の魔法陣。そしてそこから、デフォルメされた軽装騎士風の俺が出てくる。今日もちゃんと二刀流だ。

さて、これは《特異点》である俺が無条件で行使可能な能力、《召喚フィールド生成》を使用した結果である。これは本来ならば教師の立ち会いが必要な召喚獣の喚び出しを、俺が無条件で行えるということを意味している。まあ正確には無条件ではなく、体に幾ばくかのだるさが襲いかかってくるのだが、それに目を瞑ればほぼノーリスクで召喚獣を召喚できる便利な能力だ。使い所さえ誤らなければ、試召戦争でも役立つことだろう。

ババァはこの俺の能力が気に入らないらしく、一年の時からずっと研究を行っているのだが、あまり成果は上げられていないらしかった。

「で、今日は何をすりゃいいんだ？」
「システムへの負荷を調べるよ。そこにあるソファを持ち上げな」
「へーい」

ところで、俺の召喚獣の左手には腕輪が嵌めてある。通常召喚獣の腕輪といえば様々な特殊効果を持つアイテムで、テストで一定以上の点数（４００点くらいがボーダーだったか）をマークした生徒のみが扱うことの出来るお楽しみアイテムみたいなものなのだが、俺の召喚獣は点数に関係なく常にこの腕輪を嵌めていた。

この腕輪は《干渉》という能力を持っており、本来は《観察処分者》である明久の召喚獣のみが持っている現実の物質への干渉能力と、他様々な効果を併せ持っていた。使用するのにはテストの点数をいくらか消費しなければならないが、それを補って余りある効果

だと俺は思う。
ババァ曰く俺の召喚獣がこの腕輪を所持しているのは単純にシステムエラーだそうだが、所持をリセットするのには未だ成功の兆しが見えないので黙認措置を取られている。
俺は相当に差し迫った時にしかこの腕輪を使うつもりはないが、昨日は果たしてこの腕輪を使用するに値する状況だったのだろうか……。

「何難しい顔してんだい。似合わないセンチメンタルな感傷になんて浸ってないでとっととやりな」
「はいはいすいませんでしたね妖怪白ババァ長」
「いったい何さねその無駄に長い蔑称は！」
「妖怪としろばんばとババァと学園長を足してみました」
「誰も説明なんか求めちゃいないさね！」
「聞いたのはそっちじゃねえか……」

嘆息し、先ほどババァに持ち上げろと命令されたソファの元まで移動する。召喚獣は人間の数倍の力を持っているらしく、やろうと思えばおそらく岩を砕くことだって可能だという。ソファを持ちあげるくらい、召喚獣には何の苦もないだろう。
意識を召喚獣に飛ばし、ソファの片側を持って一気に持ち上げた。

「じゃ、四時間ずっとそのままでいな」
「四時間！？　鬼かババァ！」
「フン、純粋に召喚獣やシステムに負荷をかけ続けた際のデータ収集さね。ぶー垂れんじゃないよ」
「どう考えても文句言うだろ！　四時間このままって、集中力切れるわフィールド生成で体のだるさが凄まじいわで最悪じゃねえか！」
「……で？」
「テメェ！　わかってやってやがるなクソババァ！」

何だか妙に得意げな学園長の顔が凄まじく腹立たしかったが、二年生になっていきなり面倒を起こすのも気が引けたので俺は必死に我慢した。我慢したんだ、偉いからな……。

結局解放されたのは本気で四時間後、昼休みが始まった頃だった。それまでずーっと集中力を切らさず、なおかつ召喚フィールド生成によるだるさを味わうという二重苦に俺の体力精神力はズタボロだ。

――あのババァ、いつか痛い目にあわせてやる……。

暗い決意を胸に秘め、俺は学園長室を後にした。

そのまま購買へ向かい昼食を購入。教室に引き返そうとしたところで雄二と島田が歩いてくるところに出会った。

「あら、一条じゃない」

「島田、久しぶりだな。雄二も、どうしたんだ？」

「いつもの面子で昼飯を食べるから、飲み物を買いに来ただけだぞ」

「ふーん。じゃ、俺も一緒に食って良いか？」

そう言って、先ほど手に入れた惣菜パンと飲み物の入った袋を掲げて見せる。

「ああ、大歓迎だ。昨日の感想も聞いてみたいしな？」

「ははは、雄二ってばなかなか面白いことを言うじゃないか」

悪役じみた笑みを見せる雄二に、俺も乾いた笑いを返す。

二人笑い合う俺たちを横に、島田が不思議そうな顔を見せていた。

☆

「へえ、姫路がねえ」
「そ。瑞希って案外積極的で驚いちゃった」

どうやら屋上で姫路謹製の弁当を食べることになっているらしく、雄二と島田は全員分の飲み物を購入するため購買に来たところで俺と出会ったようだ。姫路とは昨日のこともあってちょっと話をしてみたいと思っていたので好都合だった。ご相伴に預かることは出来なくとも、去年のクラスメイトが多数揃う面子での昼食は心が躍る。

「どうでも良いがお前ら、ジュースを全部俺に持たせるのか？　島田はともかく雅臣お前は手伝え」
「だが断る」

飲み物は全部雄二に任せ、俺と島田は悠々と屋上へ向かう。やっぱり仲の良いメンバーと居ると心が安らぐな。
ええ、そうです。その時までは俺もそう思っていました――。
屋上に辿り着くまでは、ね……。

屋上の扉を開いてすぐ、大きめの弁当箱を囲んでいるいつもの面子――明久に秀吉、ムッツリーニに加えて姫路が目に入る。……ムッツリーニが小刻みに震えていて、明久と秀吉が神妙な顔で何かを話し合っているのは何なのだろう。
俺が疑問に思うのも束の間、雄二は大股で彼らの元へと向かう。その後ろに続く俺と島田。

「おう、待たせたな！　へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」
「あっ、雄二」

明久が何かを伝える間もなく、素手で卵焼きを口に放り込んだ雄二は、

パク　　バタン――ガシャガシャン、ガタガタガタガタ

ジュースの缶をぶちまけ、突如倒れた。

「おい、雄二！」

「さ、坂本！？　ちょっと、どうしたの！？」

俺と島田が、倒れた雄二の元へ駆け寄る。

屋上の床に伏せた雄二の体は小刻みに震えており、まるで何か毒物を盛られたかのような異常な反応を見せている。っておいまさか――、

「――明久、おい、まさか」

「雅臣……。わかったんだね、今がどういう状況か」

「……」

倒れた雄二が、目で問いかけてくる。

『……どうやら姫路の実力らしいぞ』

一年の時からの付き合いは、アイコンタクトでの意思疎通を可能にした。

雄二は全てを了承したかのように瞳を閉じると、

「あ、足が……攣ってな……」
姫路を傷つけないようしっかりフォロー。優しいな……。
「あはは、ダッシュで階段の昇り降りしたからじゃないかな」
「うむ、そうじゃな」
明久と秀吉も、そのフォローに回る。
「え、でもダッシュでは来てないけど？」
だが、島田はまだ事情を把握できていないようだ。
彼女を黙らせるべく、俺は彼女の手を取った。今は彼女を退場させるのが先決。
目で問えば、明久も秀吉も頷いている。
「ちょっと来てくれ島田。大事な話がある」
「え？」
「良いから。すごく大事な話なんだ！」
「え、そんな……急に、言われても、ウチは……吉井が、その」
何を勘違いしているのかはしらないが、とにかく好都合だ。
島田を遠ざけ、それに乗じてここから去れば俺の命は助かったも同然。
悪いな明久、秀吉。俺は自分の命が大事なんだ――。
「――ところで島田さん。その手をついてるあたりにさ」
「え、な、何よ？」
「さっきまで虫の死骸があったよ？」

「明久お前余計なことを！」
「えぇっ！？　早く言ってよ！」

そう言って、ビニールシートについていた手を慌てて離す島田。
おそらく明久の指摘は嘘で、彼女を遠ざけるための方便なんだろう。
その思惑通り、島田は手を洗いに行って席を外した。
そして男四人で視線だけの作戦会議が始まる。

（明久、貴様俺を逃すまいと……！）
（当たり前じゃないか！　よく考えたら雅臣逃げる気満々だったし！）
（どう考えても逃げるだろ！　この状況で逃げないわけがない！）
（明久、雅臣、今度はお前らどっちかが行け！）
（何で俺が！？）
（ぼ、僕に死ねって言ってるの！？）
（流石にワシもさっきの姿を見ては決意が鈍る……）
（雄二、お前が行け！　一度食ったら二度目も変わらないはずだ！）
（変わるに決まってるだろうが！？）
（姫路さんは雄二に食べて貰いたいはずだよ！）
（そうかのう？　姫路は明久に食べて貰いたそうじゃが）
（そんなことないよ！　乙女心をわかってないね！）
（どうでもいいから早く食べろ雄二！）
（お前何か俺に恨みでもあるのか！？）
（ええい、往生際が悪い！）

「あ、姫路さんあれは何だ！？」
「えっ？　なんですか？」

（喰らえ！）
（おらぁっ！）

（もごぁぁっ！？）

明久が指差した明後日の方向に姫路の意識が飛んだと同時、俺と明久の腕は凄まじい勢いで弁当を掴みそれらを雄二の口の中いっぱいに詰め込んでいた。ち、まだ口の中に残ってやがる。

顎を掴んでしっかり食べるお手伝いだ！

「完璧な仕事だ、明久」

「うん、雅臣もね」

「……お主ら、存外鬼畜じゃな」

気のせいだ。多分。

雄二の体が無茶苦茶小刻みに震えているのも気のせいだ。多分。

「ごめん、見間違いだったよ」

「あ、そうだったんですか」

しかしこんな古典的な手に引っかかるとは、姫路瑞希――純粋だな。

「お弁当美味しかったよ。ご馳走様」

「うむ、大変良い腕じゃ」

「お俺もいきなり登場して頂いてしまったが美味しかったぞ。ありがとう」

「ありがとうございます。えーと、確か、昨日お相手した一条君でしたよね」

「ああ。Gクラス所属の一条雅臣だ、よろしく」

「はい、よろしくお願いしますね」

姫路は純朴な笑みを見せ、俺に挨拶を返してくれた。

しかしまあ、知らない相手が弁当を食べていても文句一つ言わないとは良くできた娘だ。

「確か一条君は女装が似合う方なんですよね？」
「明久、雄二、ちょっと来い」
「ちょ、ま、雅臣僕は何も言ってない」
「変な事言ったのはこっちのバカだ」
「何を言ってるのさアホ雄二！」
「一条君？　どうかしましたか？」
「いや、何でもない。いいか姫路、それは根も葉もない嘘でだな」
「でも、一条君は吉井君と同じくらい顔のラインが細くて綺麗ですし、目も大きいし、きっと女装したら可愛らしいと思いますっ」
「うん、姫路それは追い打ちをかけるって言うんだよ覚えておくと良い」

とりあえずあそこのバカとアホ二人は制裁決定だな。

「あ、そうでした」

急にポン、と手を打つ姫路。全員の注目が彼女に集まる。

「実はですね――」

ごそごそ、と鞄を探り、

「デザートもあるんです」
「姫路ッ、あれを見ろ！」
「やめろ雅臣！　次は俺でもきっと死ぬ！」

ちっ、作戦失敗か……。一度喰らった攻撃は二度も喰らいはしな

いと言うことだろうか。だが誰かにこれを押しつけない限りは俺に未来はないぞ。

（雅臣！　俺を殺す気か！？）
（仕方ないだろ！　誰かを犠牲にする他生きる手立てはない！）
（馬鹿を言うな！　それなら明久の方が適任だろうが！）
（……それもそうか）
（ちょっとーっ！？　何でそこで納得してるの！？　っていうか雅臣と雄二、そのポーズは何！）
（俺が明久の鳩尾に拳を叩き込み――）
（――続けざま俺が口に詰め込む作業を担うわけだ。わかったかアホ）
（いやぁー！　なにその連携プレイ！）
（（俺たちのため、潔く死ね！））
（やめるんじゃ、三人とも！）
（ひ、秀吉……？）
（……ワシがいこう）
（やめろ秀吉、死ぬぞ）
（ねぇちょっと雅臣、なんか秀吉には優しくない！？）
（可愛いは正義だ）
（雅臣、聞かなかったことにしておくぞい）
（しかし秀吉、勝機はあるのか？）
（大丈夫じゃ。ワシの胃袋はかなりの強度を誇る。せいぜい消化不良程度じゃろう）

それだけで済めば苦労はしないが、そう簡単に終わらせてくれないのが姫路瑞希という少女の本質のような気がする。

「どうかしましたか？」

「いや、何でもないぞ！」
「うんうん、何でもないよ姫路さん」
「あ、もしかして……」
姫路が顔を曇らせた。まずい、嫌がっていることを気取られたろうか。
「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ」
確かに、姫路の取り出した容器に入っているデザートはヨーグルトと果物のミックス（のように見えるもの）だ。箸で食べるには適していないだろう。
「取ってきますね」
そう言い残し、屋上から去る姫路。チャンスは今しかない。
「では、この間に頂いておくとするかの」
「……すまん。恩に着る」
「ごめん、ありがとう」
「悪い、秀吉」
雄二、明久、俺が続けて謝罪するのを見て、フッと笑いかける。
「別に死ぬわけではあるまい。そう気にするでない」
「そ、それもそう……だよな」
あまり自分の言葉に自信が持てないけどな。
「よし、ワシに任せておくのじゃ。いただきます」

手に取った容器を傾け、一気に流し込む秀吉。

「むぐむぐ。なんじゃ、意外と普通じゃとゴばぁっ！」

……合掌。

「……おい、雄二、明久」

「……なんだ？」

「……俺が悪かったな」

「……わかったんだったら、良い」

屋上の春風を受けながら、俺たちは遠い目で青空を見上げた。綺麗だな、空。

第六問（前書き）

半年（超えてる）ぶりとかほんとすみません

第六問

「そういえば坂本、試召戦争のことだけど」
「うん？」

あの騒動の後に戻ってきた島田――結局お茶にしかありつけていないために怒り心頭だったが、感謝はされても怒られるようなことはしていないと俺たち全員が思っていることだろう――や、復活した秀吉、ムッツリーニを交え、俺たちは食後の団らんを楽しんでいた。明久が秀吉にお茶をたくさん飲ませていたのは殺菌作用を考えてのことなのだろうか。

「相手はBクラスなの？」
「ああ。そうだ」
「ほーう。次こそは雇って頂けるんですかねぇ代表サマ」
「……お前はさっきから妙に突っかかってくるな」
「気のせいだ」

別に仲の良い面子の多いFクラスといきなり対戦する羽目になったことを怒っているわけではないし、事前の報酬提示すらされなかったことを根に持っているわけでもない。ないったらない。

「……まあいいか。ま、俺たちの次の相手はBクラスだな」
「それを俺に言うということは、次は雇う気があるわけだ」

いくら俺がFクラスメンバーの雄二達と仲が良いといっても、俺の所属は正式にはGクラス。
クラスを纏める代表が敵対するかもしれない別クラスの相手にこれからの作戦を漏らすなんてあり得ないからな。これはようやくF

クラスと共に戦えることになると見ても良いだろう。

「勿論、次はFクラスの切り込み隊長役として存分に戦って貰うさ」

「腕が鳴るね」

「それにしても雄二、どうしてBクラスなのさ」

「そうよ。目標はAクラスなんでしょう？」

俺と雄二の会話に、明久と島田の二人が続けた。

確かに、Fクラスの目標はAクラスのシステムデスクの筈だ。Dクラス戦で初陣を勝利で飾り、メンバーに自信をつけさせたのだからこれ以上は十分だと思わないでもない。

いや、待て。Dクラス代表の平賀が何か言っていた。確か――、Bクラスの室外機を事故に見せかけて壊す、だったか。これがBクラスへの宣戦布告に関係するのは明らかだろう。

「正直に言うが」

俺が一人で考え込んでいる間に、雄二が神妙な面持ちで口を開いた。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスに勝てやしない」

「……へぇ？」

「何か言いたそうだな、雅臣」

「まさか雄二がそんなことを言うとは思わなかったからな」

そう、この坂本雄二という男が、何かをする前にいきなり負けを認めるなんてらしくない。というか、あり得ないというのが本音だ。

だが、それも仕方ないのかも知れない。Aクラスは学年トップ50の成績優秀者が集まったクラス。だが、四十人は上手く立ち回れば俺でも相手ができるレベルの成績だ。問題なのはその上の残り十

人。特にAの代表霧島翔子は奇襲して全員で周りを取り囲んだとしても難なく切り抜けてしまうだけの圧倒的な実力を持っている。

「じゃあ、Fクラスの最終目標はBクラスに変更なの？」

「いや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「言ってることが矛盾してるぞ、雄二」

雄二も自覚はしているだろうけれど、一応突っ込んでおく。

「クラス単位では勝てないかも知れないだろうから、一騎打ちに持ち込む」

「一騎打ち？　どうするのさ」

明久の問いは尤もだ。これだけじゃ雄二が何を考えているんだかわかりゃしない。

雄二は周りの皆のそんな思いを感じたか、小さく笑みを浮かべてこう言った。

「――Bクラスを使う」

……ふむ。なるほどね。雄二の考えていることが何となく読めてきた。

雄二は自分たちの置かれている環境――要は劣悪な学習環境を武器にして《交渉》に望むつもりなのだろう。

下位クラスが上位クラスに試召戦争で敗北した場合、ペナルティとして設備のランクが一つ下がってしまう。それに対し、上位クラスが下位クラスに敗北した場合は、下位クラスとその設備が入れ替えられてしまうのだ。

つまりFクラスより上のクラス――雄二らから見れば全てのクラスは、Fクラスに敗北した瞬間便利な設備から一転、畳と卓袱台に

転落してしまうことになる。まあ、普通の生徒なら誰でも嫌がるだろう。
雄二は、そこを利用しようとしている。
具体的には――、
「設備の交換をナシにして、ＢクラスにＡクラスを攻めさせるってとこか。そしてＡクラスに脅しをかける。Ｂクラスとの試召戦争直後に勝負を挑むぞってな感じで。どうだ、正解か？」
「ああ、満点だ」
そもそもＡクラスは学年トップクラスの設備を誇るが故に、試召戦争を起こすことにメリットは何も無い。
おそらくＡクラス生徒の殆どが、試召戦争には消極的だろう。とすれば、雄二の作戦が上手く行く可能性は高い。
「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。Ａクラスならば一騎打ちよりも試召戦争の方が、より確実に勝利を収められるんじゃぞ？一騎打ちに乗ってくるのかのう？」
秀吉の言うこともまた正論だ。
だが、雄二が何の作戦も無しに希望的観測を述べるとは考えにくい。つまり、こいつには何らかのアテがあるはず。
俺の予想に違わず、自信満々の顔で雄二は答えた。
「俺に作戦がある。心配するな。とにかくＢクラスをやるぞ」
「ま、考えがあるなら良いけど」
「と、いうわけで明久」
「ん？」
「テストが終わったら宣戦布告してこい」
「断る」

ま、無理もない。下位クラスの使者が酷い目にあうのは当たり前だし、何より明久は現に体験しているためだ。
色々雄二と明久の間で会話が交わされ、じゃんけんで決めた結果――、

「……わかったよ」
「頼んだぞー」

明久は敗北、渋々Ｂクラスへの使者となることが決定した。
そして、それでその日の昼食はお開きになり、俺はＧクラス、雄二らはＦクラスへと戻った。
ちなみに、テスト終了後宣戦布告に赴いた明久は、やはりＢクラスの連中にズタボロにされて戻ってきたらしい。
雄二の奴、わかってやってるな……。タチが悪い。

☆

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った雄二が、座布団に座る皆を見下ろすように言った。
あれでなかなか威厳があるように見えるのだから、雄二のカリスマというやつは馬鹿に出来ないと思う。
あ、ちなみに。俺は乙プレート一枚と丙プレート三枚で、Ｆクラスの味方としてこの試召戦争に参加することとなった。
Ｂクラス代表の根本はプレートを提示しなかったのだが、果たして策があるからなのか、あるいは……。

「……いや、今そんなことを考えすぎてもしょうがないか……」

Fクラスの士気を上げるべく張り上げられた雄二の声を聞き流しながら、俺はFクラス全体に視線を走らせた。

皆、頭は悪いがモチベーションの高さだけは一級品のようだ。正直Fクラスの武器は最底辺からのハングリー根性、これ『だけ』に集約されるだろう。

後はクラスの二大美少女である姫路と島田がどれだけ男子たちのやる気、士気、戦意を引き出せるかにかかっているに違いない。

男子高校生という生き物は、女子の前では良い格好をしたくなるもんだ。数少ないクラスメイトの女子に無様な格好を見せたくないという心理が働くのはごく当然のことだろう。

とすれば、前線部隊にこの二人を組み込めばFクラスの男子勢は必要以上の働きを見せるのではなかろうか。

「――前線部隊は姫路瑞希に指揮を執ってもらう！　野郎共、きっちり死んでこい！」

やはりな。雄二も考えることは同じのようだ。

奴は姫路の美少女さに当てられていない分、打算的に彼女を使うことが出来るんだろう。

言っちゃ悪いが、姫路はFクラスに与えられたこれ以上ないほど有効な駒だ。純粋に戦力として役に立ち、他のクラスメイトの能力も引き出す。試召戦争にあたり、ここまで影響力を持つ生徒はそういない。

Fクラスに姫路が在籍することは、雄二にとっては本当に僥倖以外の何物でもないだろう。

「作戦説明は以上だ。廊下から勝ちに行くぞ、お前ら！」

俺が考え事をしている合間に、雄二がその一言で締め、以降試召戦争開始までは自由な時間となった。
Ｆクラスのメンバーに様々な確認のため囲まれている雄二が解放された頃合いを見計らい、俺は教壇に近づいた。

「よう雄二」
「雅臣か……」

妙に疲れ気味な顔を見せる雄二はらしくない。
俺は笑いながら奴の肩を叩き、軽い調子で問うた。

「傭兵サマの出番はあるかな？」
「あるに決まってるだろ……。正直、姫路とお前が廊下戦での肝になるんだからな」

先ほど聞き流した雄二の説明を、短く纏めるとこうなる。
とにかく敵を教室に押し込めるのが目的のため、ＢクラスとＦクラスの教室を結ぶ渡り廊下が主戦場となる。
また、確実に獲りに行くためクラスメイトの五分の四を渡り廊下戦に繰り出し、前線部隊指揮隊長に姫路が着く。傭兵である俺は、その補佐に回る。
てな感じだ。

「期待してもらって構わんぜ」
「一昨日負けてしまった傭兵の言葉とは思えんなぁ」
「まあな。けど、失った信頼はキッチリ取り戻すよ。じゃなきゃ仕事もらえなくなっちまう」
「違いねえ」

ククク、とお互い悪い笑みを浮かべながら握り拳をぶつけあう。

いいね、こういうの。こういうのこそまさに試召戦争って奴じゃないか。

「あの、一条君」

「……ん？」

俺と雄二が戦友チックな小芝居を演じているところに、おずおずといった風な声がかかる。

振り向き視線を合わせてみれば、そこにいるのは小動物然とした姿が男子の心を掴んで放さないと噂の姫路瑞希その人が。

ついさっきまで『Ｆクラスの大事な駒』とか酷いこと考えてたからちょっと話しづらい物があるがそれはさておき。

「どうかしたか、姫路？」

「その……前線部隊でご一緒ですから、挨拶をと思って」

「そっか、サンキュな」

言って、俺は極々自然な流れで握手を求めて右手を出した。直後、俺の体を無数の視線（殺気含）が貫く。

やべえ。こいつは色々とやべえ。思わず出した手を引っ込めるという失礼を働いてしまった。

姫路が俺の右手を不思議そうに見つめているが、その理由が何にあるかは察してくれないようだ。

どうやらこの少女、自身の受ける男子からの眼差しにはとんと無頓着らしい。彼女自身に決めた相手がいるのか、はたまた色恋沙汰には疎いのか。

理由はいくらでも推測できるが、所詮人の心を覗けるわけもない。無為に思考を巡らせることは止め、俺は姫路に向き直った。

「気持ちだけ受け取っておくよ。よろしく頼むぜ、隊長殿」

「はい、任せて下さい」

姫路の士気も十分高いようで何よりだ。

俺の二度目の試召戦争は、対Ｂクラス。……根本が何を考えているかは知らないが、とにかく全力で戦うまでだ。

第六問（後書き）

帰って参りました。ものほし竿もとい９２０Ｐです。
半年も放置してるとかほんともう……。

とりあえず、頑張ります

第七問

昼休み終了のベル。それは、同時に試召戦争の開始を宣言するものでもあった。

鳴り始めた音を聞きながら、俺は改めて気持ちを入れ直す。いよいよBクラス対Fクラスの試召戦争の火蓋が切って落とされるのだ。

心情的に、俺はFクラスに近い。Gクラス《傭兵》と言えど、出来るなら雄二達の力になりたいというのが本音だ。

負けるわけにはいかない。《傭兵》は望まれて試召戦争に参加する。勝ちをもたらさなければ意味はない。

「……やってやるよ。次こそ勝つ」

ぱん、と己の拳を掌にぶつけ、気合いを入れるのと同時、戦争開始の鐘が鳴り終わった。

それを確認したか、雄二の大きく獰猛なかけ声が教室内に響き渡る。

「よし、行ってこい！　目指すはシステムデスクだ！」

『うおおおおおお！』

雄二の発破に全力で応えるFクラスメンバー。気合いは十分、負けるつもりはさらさらないようだ。

Fクラスの勝機は、Bクラスを教室に押し込む事にかかっている。DクラスにBクラスの室外機を破壊させることに関係があるのだろう。

ともかく戦術は雄二に任せ、俺はとにかくBクラスを叩く他ない。

「一条雅臣、出るぜ！」

「《傭兵》に良いところは取らせねぇ！　Ｆクラスも行くぞ！」

真っ先に教室を飛び出した俺に吊られるが如く、Ｆクラスの面々も一斉に勢いよく教室外へ飛び出した。

俺の存在もまた、Ｆクラスの面々に好影響を与えているのなら僥倖だ。前線の俺と姫路で、士気を高めることが可能になる。

廊下を猛進する俺＋Ｆクラスの人員は、およそ四十。クラスの五分の四、実に８０％がこの廊下戦に投入されている計算だ。

「こっちの武器は数学だったな！　数学に自信のある奴は前に出てＢクラスを叩くぞ！」

今回Ｆクラスの武器は数学となっている。文系が多めのＢクラスに対抗するのと、数学の担当である長谷川教諭は召喚可能なフィールド範囲が広いことが理由だ。

とにかく教室にＢクラスの面子を押し込むことが目的な以上、長谷川教諭の広い召喚可能範囲は武器になる。

メインは長谷川教諭だが、サブにもライティングの山田教諭と物理の木村教諭もスタンバっているらしい。国語や社会はからきしだが、英語、物理、数学の三教科は俺にとって三種の神器とも呼ぶべき存在。これだけでならそれこそＡクラス水準を超えると自負している俺にとって、この立会い教師陣は有利に働くだろう。

上手い具合に教科を切り替えながら、一気に駆け抜ける。

……って、そういえば隊長の姫路は……ダメだ、まだ着いてきていない。

悪いが緒戦は隊長補佐たる俺が指揮させてもらおう。

「見つけた！　Ｂクラスだ！」

俺の背後に続いているＦクラス生徒が声を上げた。
成程確かに、Ｆクラスとの力量差に余裕を感じているのか、ゆったりとした足どりでこちらへと歩を向けるＢクラスの姿がある。
その数はおよそ十人。俺たちとの戦力差は単純計算で四倍か。

「おい待て、高橋先生を連れているぞ！」

高橋教諭は学年主任であり、総合科目――つまり全科目の合計得点を武器に出来るフィールドを生成する。
各教科で確実に劣るＦクラスを完膚無きまでに叩きのめそうとするＢクラスの作戦か。
おそらく総合科目を持ち出されればこちらと相手方の得点差は文字通り桁違いなレベルになるだろう。
圧倒的な戦力差を持って敵の力だけでなく心も潰すつもりなのだ。
やってくれる。

だが――、俺がこちら側にいることを忘れてもらっては困るというもの。

「Ｆクラスは高橋先生のフィールドでは戦闘しないように分散！
先に数学や物理のフィールドで仕掛けろ！」
「一条、何か策があるのか！」

俺が声を張り上げると、素直に従ってくれながらもＦクラスの生徒がそのような疑問を投げかけてきた。

「総合科目では俺が全部相手してやる！　さあ行け！」
「よくわからんがわかった！　頼んだぞ《傭兵》！」

「任せとけって！」

走り去る男子とハイタッチを交わしながら、俺は悠然とこちらへ向かうBクラスに向かって歩み寄った。

分散し始めたFクラスの動きに戸惑いを見せつつあるBクラスの生徒たちだったが、駆け抜けたFクラスを六人ほどが追いすがり、残り四人がこちらに向き直った。

その目の色は警戒と侮りが入り交じったもので、一人で現われた俺を危険視しつつも馬鹿にしているといった風だ。

「一人で良いのかよ？」

Bクラスの一人が口を開く。

挑発的な笑みを浮かべているそいつに対し、俺も挑発で返してやる。

「一人で十分。俺以外を投入するのは時間と戦力の無駄だしな」

「……言ってくれるじゃねえか、すぐに補習室送りにしてやるよ！先生、頼みます！」

言って、側の高橋教諭と目を交わすBクラス。

才女高橋教諭が静かに頷くのとほぼ同時、俺たちの足元に召喚用のフィールドが形成された。

それでは俺の戦いを始めさせて頂きましょうかね。

「「試獣召喚（サモン）！」」

Bクラスの男とハモる。

幾何学的な紋様が床の上を動き回り、一際明るく輝きを発した後。

現われたるは我が相棒！

「来たな、相棒！」

前回と同じく、二刀流の軽装騎士を思わせる俺の召喚獣が姿を現した。

相手方はオーソドックスに鎧と剣を持った騎士風の召喚獣。

相対した俺たちの得点が、召喚獣らの頭上に浮かび上がる。

『Ｆクラス　一条雅臣　ｖｓ　Ｂクラス　野中長男』
『総合　２４５８点　ｖｓ　総合　１９４３点』

「なっ……」

現われた戦力差に絶句するＢクラスの面々。意外なことに、高橋先生もほんの僅かに眉を上げていたのが印象的だ。

まあともかく、俺の勝負科目である数学、英語、物理。その全てが、実は５００点に近づくレベルのものだったりする。

それが故の、この総合得点。俺の地の学力は、Ｂクラス水準、上手く行けばＡクラスに達するくらいはあるって事だ。

……その分日本史とか古典とかはやばいけどな。

「さて、それじゃあ勝負と行くか。覚悟しろよ！」

俺の召喚獣が、動きを止めたままの野中の召喚獣に肉薄する。

鎧と鎧の合間を縫って、左手に握った剣をねじ込んだ。だが、野中に動きはない。

Ｆクラスに与する俺の得点がそこまで予想外だったのだろうか。
４００点ほどマイナスされた野中の総合得点を横目に、俺はねじ込んだ剣を引き抜きながら、右の剣で袈裟斬りを放った。
鎧に阻まれ大したダメージは与えられないが、野中の体勢は崩れる。こちら側へと寄ってきた頭部を狙い澄まし、二重に斬る！

急所を突かれた野中の得点は、もの凄い勢いで減り行き、やがて０になる。

「っ、くそっ！」

舌打ちする野中だがもう遅い。

「さて、楽しい補習室送りだな」

「げ……」

どこからともなく現われる西村教諭に引き摺られるようにして、野中は補習室へと消えていった。
現実は非情だ。そしてついでに、俺もここで満足する気はさらさらない。

「Ｆクラス一条雅臣、さらに続けて総合科目で勝負を挑みます！」

「わかりました」

頷く高橋教諭。野中の急な退場に茫然自失のＢクラスは、ようやく己の置かれている状況に気がついたようだ。

「残念だったな」

ニヤリと一笑いした後。

俺の召喚獣が、残り三体の敵を斬り裂いた。

見覚えのある二人が、新校舎側の廊下からこちらへ向かってくる。

「あ、あれ……？　本気で雅臣が倒しちゃったの？」

「すごいです……」

分散した部隊を指揮していたのは、明久と姫路の二人だったようだ。

彼らが歩いてきた廊下の向こう、Ｂクラス教室手前では、入れ替わり立ち替わりＦクラスの攻撃を受けるＢクラスの姿が見える。

とにかくＦクラスの層（文字通り人の壁だが）が厚いため、Ｂクラスの前線部隊は徐々に押されつつあるようだ。雄二の目論みは成功したと言ったところか。多分この二人は、戦況が一段落したからこちらの加勢に来てくれたのだろう。と言っても俺の相手したＢクラスは全員補習室送りにしたので、彼らにとっては骨折り損だが。

「相手が油断してくれたお陰で何とかなったよ。Ｂは押し込めそうか？」

「うん。姫路さんの圧倒的な実力でＢクラスの士気はガタ落ち。姫路さん様々だよ」

「は、恥ずかしいですよ吉井君……」

明久の素直な賞賛に、姫路が照れてはにかんだような笑みを見せる。傍から見ている分には実に微笑ましい光景だ。

とてもじゃないが、昨日手料理で殺し殺されかけた二人の姿には見えない。

「士気はガタ落ち、ね……」
「でもちょっと気になることがあってね」
気になること？　明久の言葉に、俺は首を傾げた。
「何でも、Ｂクラスの代表は根本恭二なんだって」
「ああ、まあ、知ってるけど……」
言って、俺は明久が何を言いたいのかを理解した。
明久も、根本の噂を耳にしているのだろう。カンニングの常連という噂から始まり、『球技大会で相手のチームに一服盛った』だとか、『喧嘩に刃物を標準装備』だとか、何かと悪い評判は絶えないことを。
高校でクラスが離れてから本当に会話の機会が減って、根本の噂は何が正しく何が誤りなのか本当にわからなくなってしまった。
個人的には根本を信じたい。だが、明久の言わんとすることもよくわかる。
「……あまり考えたくはないが、根本が何かを仕掛けてくるかもしれないって事だろ？」
「う、うん……。いくら何でも雄二に何かがあるとは思えないけど……今、本陣は手薄だし」
四十人が前線に繰り出され、雄二の構える本陣防衛は彼を含め十人。
少数でなおかつ点数も低い本陣を攻められれば、Ｆクラスの敗北は必至だ。
とはいえＢクラスの教室から別働隊が出て行った様子は見られないから、雄二達に何かが起こっているとは思えない。

「僕はとりあえず本陣に戻ろうと思うんだ」
「そうか……。ああ、何か起こっては欲しくないが、用心に越したことはないな……」
「そういうことだから、姫路さんと前線の指揮、よろしくね」
そう言って明久は姫路と二言三言会話を交わし、Ｆクラスの教室へと駆けていった。
残された形になる俺と姫路は、何となく視線を交わしあい、
「んじゃ、行くか」
「はい、補佐をお願いしますね、一条君」
俺と姫路は、二人連れ立って前線へと舞い戻った。
Ｂクラスの教室は渡り廊下を越えて新校舎側に存在するが、現在Ｆクラスはその教室を囲むようにじりじりと包囲網を狭めていっている。
形状は有利なのだが、Ｂクラスの散発的な抵抗を受け、Ｆクラスの面々は攻めあぐねているようだ。
前線に出ている相手は少ないのにも関わらず、決定打を得られない。……つまりＦクラスの点数の低さはかなりのものらしい。
なんだか物悲しいな……。
「姫路さん、救援を！」
「姫路さん頼む、手伝ってくれ！」
「姫路さん！」
「え、あ、その……」
今にも戦死しそうなＦクラス生徒たちが、戦場に姿を見せた女神――に見えるんだろう――姫路に救援を要請する。
確かにこの状況を打破できる力を持つ姫路を頼る気持ちはわから

ないでもないが、当の本人は誰を助ければいいのかわからずにおろおろしている。
これじゃ意味がないし、そもそも姫路の戦力を無駄に削るのはFクラス的に避けねばならぬ事のはず。とくれば、ここで救援に向かうべきは俺だよな？

「姫路、落ち着け。指揮官はどっしり構えて応援してればいい」
「お、応援ですか？　……わかりました。応援します！　頑張って下さい！」
「というわけで、Fクラス一条雅臣が支援する！」
「男は引っ込んでろ！」
「姫路さんが良いんだよ！」
「《傭兵》テメェー！」
「……お前らなぁ」

何というか、自分に正直な奴らだ……。
それが悪いこととは言わないが、正直すぎて若干姫路が引くのではなかろうか。
いや、まあ……いいや。とっとと済まそう……。

三回ほど召喚獣を操り、俺はFクラスの面々を救援した。
さしあたり済ませるべきことを終えた俺は姫路に後を任せ、戦場に視線を走らせる。
根本が何か動きを見せたら、いの一番に反応できるようにしておこうというのが狙いだ。
……まあ、《傭兵》の制約上、俺が根本を手にかけた時点でFクラスの敗北が決定してしまうのだが。

「それにしても、Bクラス……前線に出てきたのは半分にも満たないんじゃないか？」

俺が相手した四人含め、始め渡り廊下に姿を見せていたのが十人。その後ちょくちょくと教室から部隊が入れ替わっていたが、その数はクラス人員の半数、二十五人を下回っていたように思う。
じゃあ残りはどこで何をしているというのやら。やはり根本が何かを企んでいることに間違いはないのだろうか……。
いや、何か企んでいること自体は構わない。雄二だって策謀を巡らせている。
つまり、俺が言いたいのは、だ。根本にあまり卑怯な真似をして欲しくないということだ。

友人を軽蔑したくないし、軽蔑されている様を見たくはない。
それよりも何よりも……小山を――、

「……いや、何を考えてるんだ俺は。ええい、やめだ、やめやめ！」

一瞬変な方向に思考が飛びそうになる。頭を振って、俺は自分の脳裏に一瞬浮かんだ思いを吹き飛ばした。
何を考えているのか自分でもわからない。まったく、根本の策略と小山がどう結びつくんだ。アホが。

「ん？」

少し廊下が騒がしい。
視線をやれば、たった二人のBクラスの側に座り込む島田の姿と、それを取り囲み攻めあぐねるFクラス部隊の姿が。
いつの間にか前線に戻ってきた明久が部隊を指揮しているようだが……。

「島田、人質にでも取られたのか？」

助けに入ろうかとも思ったが、多分明久に任せておいても大丈夫だろう。
戦況はFクラス有利だ。後は適当に討ち漏らしがいないかを探し、雄二の命令の後に全軍突撃、ってとこだろうか。
今は確実に敵戦力を潰して――、

「って、根本……？」

――そんなことを考えていた俺の視界に、悠然とBクラスの教室を後にする根本の背中が映る。
島田たちに気を取られているFクラスの面々が、その動きに気付く様子はない。
スタスタと廊下を進んでいく根本は、やがてとある教室の前で足を止め、そしてその中へと姿を消した。

教室の上部プレートに書かれた文字は、『C』。

俺の足は、知らず知らずのうちにそちらへと向いていた。

第八問

Ｃクラス教室の前で足を止めた俺は、自分が根本の背を追ってここまで来た理由を探していた。

さっきは、根本が何かを企んでいるかもしれないと思った。だからその企みを暴くためにここまで来たのか？

それとも、何か別に理由があるのか。何か理由を見つけない限り、俺は心情的にＣクラスの教室に入ることができないだろう。

何故そんなことを考えるのかと言われればそれまでだ。考えてしまうものは仕方がない。

ただ、ここを訪れた理由を小山に訊ねられても、答えられる気がしないのだ――。

「いや、なんで？」

――またも脳裏に浮かび上がってきた『小山』という単語に、俺は思わず突っ込んでしまう。

根本と小山は最早俺の頭の中では同じ存在になっているのか。いやまあ確かに二人は交際しているが。

それにしたって小山のことを考える頻度が高すぎる。恋する乙女じゃあるまいし。

……そりゃ幼馴染みで、昔は交流があったから、勝手知りたる女子ではあるけれども。

なんだかモヤモヤするな。結局あれか、『根本』が『小山』のいるＣクラスに入っていったから、それが気になったってのが本音か？

「アホくさい……」

俺はそんな難しいことを考えられるような人間じゃない。

俺はGクラスの《傭兵》、一条雅臣だ。Fクラス陣営に与している以上、Fクラスの利益になるよう情報を仕入れるのはごく当然のこと。

それに、根本は友人だ。奴が限度を超えて卑怯な真似をするつもりなら、ぶん殴ってでも止める。そのために俺はCクラスの教室に行く。それだけだ。

「だから何も問題はない」

「……何が問題ないのよ」

「うわああ！」

Cクラスのドアに手をかけようと右手を伸ばした瞬間、それが横へ一気にスライドした。

そして、目の前にはジト目でこちらを見据えるCクラス代表、小山友香の姿が現われる。

急な登場に思わず驚いて叫んでしまった。そんな俺の反応は、余計小山の視線を冷たくするだけ。

「あのね、一条。何か用があるならとっとと済ませてよね」

「いや、別段用があるわけでは……」

「じゃあ何？　用もないのにCクラスの教室の前にぼけーっと立ってたの？」

小山にCクラスまで来た理由を訊ねられることは予想済みだったし、その理由もちゃんと考えてきたってのに、彼女から鋭く投げかけられる質問に俺は解答することが出来ないでいた。

急に出てくるから心臓に悪いんだ。しかも、小山とはめっきり会

話の数が減ったのも俺の態度に影響を見せている。

「時間をくれ。考える時間」

「……はぁ？」

「……そうだ、根本。根本がこの教室に入っていっただろ。根本に用がある」

ちょっと心を落ち着かせ、自分がここに来た理由を改めて伝える。

そう、俺は根本が何を考えているのかを知っておかなくてはならない。そう簡単に手に入る情報ではなかろうが、それでもだ。

「根本クンは来たけど、一条、あんたは今Ｂクラスの敵なんじゃないの？」

「うぐ」

確かに小山の指摘通り、俺はＢクラスの敵である。

常識的に考えて、Ｂクラス代表である根本に近づける立場ではないし、よしんば近づいたところで根本が何を企んでいるのかを知り得る術はない。

よく考えたらこの状況から根本の策略を知るなんて不可能じゃないか。何を考えてるんだ俺は。

「Ｃクラスはまだ中立だけど、心情的にはＢクラスの味方よ。そんなところにノコノコ来たら不味いんじゃない？」

「……確かに、不味いかもなあ……」

続けざまに放たれる小山からの指摘は、まったく的を射たものだ。

Ｃクラス的には、学年の底辺たるＦクラスの専横は忌避して然るべきものだろう。Ｂクラスの味方をしたくなる気持ちもよくわかる。

Ｃクラスは、潜在的にＢクラスの味方となっているわけだ。そん

なクラスに、現在は敵のFクラスとして試召戦争を戦っている俺が入っていけば、空気が悪くなることは必然。
小山の指摘は、暗にそれを指している。俺が針のむしろに晒されることについて警告しているのだ。
だが、ここまで来てすごすご引き下がるのも間抜けを通り越してただのアホだ。俺の立場を利用して上手く情報を引き出す手立てはないだろうか。

「……ん、そういえば、廊下が静かになったな……」
「そうね。戦争は四時までで一旦休戦にする条約を結んだらしいから」

初耳だ。俺たちが廊下でBクラスを押し込めるべく奮闘している間に、根本と雄二達がそのような条約を結んだのか。
……待てよ。そう考えれば、俺がCクラスに入って根本の本音を訊ねることは可能になるぞ。

「小山、根本と話をさせてくれ」
「一条、人の話を聞いてたの？　だから……」
「今は俺も中立だぜ。《傭兵》は所属陣営が一日ごとにリセットされるからな」

そう、《Gクラス特別ルール》の第七項にある。

『試召戦争が日を跨いで行われる場合、《傭兵》の所属クラスは一旦リセットされる』
『翌日に再度クラス代表同士で報酬提示を行い、《傭兵》は所属クラスを選択する』

といった具合に。

戦争を四時までとし、明日まで休戦にするというなら、試召戦争は日を跨いで行われることに他ならない。
現在俺はFクラス所属ではなく、Gクラス所属。つまりフリーの傭兵さんって寸法だ。

「フリーの傭兵さんが、雇い主の情報を集めるのは悪い事じゃないよな」
「本当、屁理屈だけは得意ね」
「頭が回るって言ってくれよ。……それとも、そこまで俺と根本を会わせたくなかったか？」
「……さあね」

俺の指摘には答えず、くるりと踵を返した小山。
その背中を追って、俺はCクラスの教室へと足を踏み入れた。試召戦争の準備でもしているのか、妙に騒がしい。
だが、俺が教室に入った瞬間、Cクラスの面々の眼光が一斉にこちらを向いた。俺が《傭兵》で、Fクラスの味方だってことは知れ渡ってるんだろう。
俺はなるべくCクラスの皆を刺激しないよう、敵意はないことを示すために両手を上げながら教室の奥へ向かった。

ただ無言で、俺は歩く。その足が向かう先には、Bクラス代表、根本恭二がいるのだ。

「……なんだ、一条か？」

飛んできた声は、どこか状況を楽しんでいるような声音だった。
視線をそちらへ向けてみれば、奥の壁に寄り掛かるような形でこちらを見据える根本。
そしてその周りには、いつの間に連れられてきたのかBクラスの

取り巻きが数人。
やっぱり何かを企んでいるようだ。嫌な予感ってのは当たるもんだぜ、まったく……。

「よ、根本」
「Cクラスに何の用だ？　坂本に頼まれて情報収集でもしに来たか？」

とりあえず敵意がないことを示そうと出来るだけ和やかに挨拶をしてみたが、効果は薄いらしい。
とっとと本題に入った方が良さそうだ。

「雄二は関係ないけど……まあ、お前に用があって」
「へぇ。一応言っておくけど、BクラスはFクラスと明日の試召戦争開始まで、試召戦争に関するあらゆる行為を禁止する協定を結んでるんだが。お前が無関係のCクラスに入ってくるのは協定違反にならないか？」
「ならない。それにそれじゃ根本に都合が良過ぎるだろ」

根本の指摘は先ほどの小山からの指摘と異なるが、同時に似通ってもいる。故に、同じ理由で論破は可能だ。
試召戦争のルールに則れば、休戦状態となっている今、俺は現在Gクラス所属。
互いに協定を結んでいるのはBクラスとFクラスであり、俺は中立の立場にある。つまり今は俺が何をしようと問題はないのだ。
それに、だ。根本の『無関係のCクラス云々』の指摘はどう考えても無理がある。

「お前だって無関係のCクラスに入ってきてるだろうが」
「まあな。だが俺は友香に何を頼んだわけでもないぜ。ただ『彼女』

がいる教室に来ただけだ」
「ま、そうだな。それについては俺が何を言える立場でもない」
いくらでも言い様はあろうが、根本と小山が交際しているという事実がここで活きてくる。
自分の恋人に会うため、この教室にいるとなればそれを止める権利など誰も持ち合わせはしないのだ。
取り巻きもそう。根本の恋路を応援するためだとか何とか理由を付ければ着いてこられる。

「頭が回るね、根本」
「お褒めにあずかり光栄だな」
「さて。それじゃ単刀直入に訊くが……お前、何を企んでるんだ？」

戦力で勝るFクラスに対し、全力で戦いに臨まなかったのには必ずワケがあるはず。
そもそも、根本がこの教室にいることを屁理屈並べて説明づけようとしている時点で何かがある。
多分答えては貰えないだろうが、根本が何を考えているのか聞いておきたかった。

「答える義理は？」
「中学時代のよしみでどうだ」
「ちと薄いな」

仰るとおりで。

「どうせなら勝てる方に着きたいだろ？　心情的に。流石に二連敗はご免だしな」
「なるほどねえ。一応聞くけど、正直に伝えたらどうしてくれるの

かな？」
「取引は禁止なんだろ、根本。だからこれはただのお願いだな」
「おいおい、それじゃ本格的に答える義理がなくなるぜ？」

ああ、まったくその通り。元々根本にはこの質問に答える義理など何も無い。
俺の厚かましいお願いってワケだ。だからそれはそれでもういい。根本が何かを企んでいること自体は確実なのだから。
だから、俺は自分の気持ちを正直に伝えておくことにした。

「根本、他人から謗りを受けるような真似だけはやめておけよ」
「おいおい、何の心配だ？」
「俺は友人が軽蔑される様は見たくないし、軽蔑もしたくないんだよ。ただそれだけだ」
「……ふん、そうか。ご忠告痛み入るな」

ニヤリと笑みを零す根本は、俺の本音を聞いたところで特に目立った反応は見せなかった。
それはそれで構わない。一応、自分の言いたいことを言えたのだからそれでよし。

「さて、それじゃそろそろ帰るか――な？」

これ以上ここにいても得られる物は何も無いだろう。
そう考えて踵を返した俺の視界に映り込んだのは、Cクラスの生徒たちに隠れている数学の長谷川教諭だった。
目が合ったので、一応会釈をしておく。……なんでここに先生がいるんだ？

「……なあ根本。Fクラスと結んだ協定って、どんなんだ？」

「今日の試召戦争は四時までとし、明日九時から休戦時の状況を再現した上で再開する。休戦している時間中、試召戦争に関する行為の一切を禁ずるってとこだぜ？」
「協定違反したらどうなる？」
「ま、一方的に攻められても文句は言えないんじゃないか」
「一方的に、ね……、っ！」

頭の中で、協定やら長谷川教諭の存在やら様々なピースが組み合わさって、根本の企みが見えてきた。

根本は、どういう理由でかはともかく、雄二達FクラスがCクラスに、確実に接触してくると踏んでいる。
だからこその取り巻き、だからこその長谷川教諭だ。Cクラスへの接触を図るのはおそらく雄二達Fクラスの主要面子。
そんな奴らがCクラス、つまり小山と接触したが最後、根本は協定違反を盾に雄二の首を獲るつもりなのだ。

「お前……」
「あら、バレたか。他言無用で頼むぜ、一条。俺はスマートに勝ちたいんだ」
「……雄二達は来るのか？」
「来るでしょうね。Cクラスは漁夫の利を狙っているんだもの。Fにはちょっとキツいから、不可侵条約でも結びに来るんじゃない？」

今まで俺と根本の会話を聞いているだけだった小山が、それに混じってくる。
Cクラスが漁夫の利を狙う――つまりBクラスとFクラス、どちらかが勝利するにしてもその勝者へ試召戦争を仕掛け、勝ちを取るってことだ。
確かに、Bクラス戦に勝利してもかなり消耗してしまうであろう

Ｆクラスにとって、Ｃクラスとの連戦はかなり痛いだろう。
雄二のことだから、それを防ごうと不可侵条約を結びに来るくらいのことはするはずだ。
だが、このまま雄二達がＣクラスに来てしまえば、Ｂクラスの勝利は確定する。
よしんば逃げおおせたところで、待っているのは明日のＢクラス戦。Ｆクラスがそれに勝利したとしても、漁夫の利を狙うＣクラスとの連戦は避けられない。
根本は三段構えで勝ちを獲りに来ている。俺の想像に過ぎないが、おそらく、根本の考える勝利はＢクラスの勝利ではない。

『Ｆクラスの敗北』こそが、根本の勝利なのだ。
なるほど、確かにスマートと言えばスマートだ。

とはいえ、休戦時の状況から開始するとしたならば、個人で圧倒的な強さを持つ姫路を万全の状態で戦争に臨ませることにはならないのだろうか。
個対個の戦いで、姫路と渡り合える戦力がＢクラスに存在する、あるいは、姫路を無効化する手段か何かがあるなら話は別だが……。

「卑怯だと思うか、友香、一条」
「私は、別に。合理的で良いんじゃない？」

小山の言葉に、根本はほんの少しだけ眉を上げた。どこか意外そうな表情だったのは気のせいか？
まあそれはともかく、尋ねられた以上俺も答えないわけにはいくまい。

「俺も今のところ特には。まあ……明久が何を言うかは知らないけど」

明久は根本のこういう戦いっぷりが気に入らないだろうな。うん、絶対気に入らないと思う。
だが、俺個人としては、まだ許せる範囲の行動だ。まあ、俺も気持ち的にはFクラスの味方ではあるのだが。これも戦争なのだから、仕方がない面はあろう。
そんな事を考えていたら、急に教室の扉が開いた。ついにFクラスが到着したかと思って身構える俺だったが、そこに姿を見せたのは知らない男子生徒だった。
ふぅ、と胸を撫で下ろす俺は、やはりFクラスの味方がしたいのだろう。やれやれ、全然公平な傭兵じゃないな。

「探したぞ根本。例のモノ、渡しとくぜ」
「ああ、確かに受け取った」

根本の元まで歩いてきたその男子生徒は、Bクラスに所属しているらしい。握っていた何かを根本に手渡し、俺を一瞥した後に教室を出て行った。
何を受け取ったのやら、俺は思わず根本が手にしたモノを凝視する。桃色でちょっと細長いそれは、

「……それ、ラブレターだよなあ、多分。……男にもらったって、お前……」
「誤解するな！」
「いやでもお前それは」

これ以上ない物的証拠じゃなかろうか。可愛らしい封筒は根本が手にするのは少々無理がある代物なんだが。

「一応、必要な物なんでな」

「……まあいいけど。お前、本当に誰かから軽蔑される真似だけはやめろよ」

それだけは、本当にやめて欲しい。

そこまで酷いことは考えてなかろうが、一応な。

この心配が、杞憂のままで終わればいいんだが……。

第八問（後書き）

主人公の一条雅臣が鋭すぎるのではなかろうかという疑問が、現在自分の中で渦巻いています。
もしよろしければ、ご意見等を頂けはしませんでしょうか。

第九問

時刻は四時半を回った頃。
Cクラス教室のドアが再び開かれて、ついに俺の懸念は現実のものとなってしまった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

野性味溢れる精悍な顔立ち、がっしりとした体格。最底辺のクラス代表を務めていながらもまったく褪せることのない大胆不敵なオーラ。ワイルドという言葉がとても似合う我が友人、坂本雄二がついに姿を見せたのだ。
その後ろには明久と姫路、ムッツリーニ、島田、そして『モテないが諦めない男』として一定の評価を得ている須川が軒並み顔を揃えている。
Fクラスのレギュラー陣総出と言ったところか。秀吉はいないようだが。

「私だけど、何か用かしら」

Fクラスの登場に顔色一つ変えず――企み事の存在を察知されぬよう努めて平静な声音で小山が皆の前に出て行く。
俺は根本と共にFクラスからは死角の位置に立っているので、明久や雄二らがこちらに気付く様子はない。
今ここで俺が声を上げれば、あいつらは根本の謀から逃げおおせることは出来るだろうか。

「……一条、他言は無用だぜ」
「……ああ」

「フェアじゃないもんなぁ。向こうは協約違反をしに来てるんだから」

根本の言葉は正しい。ここで俺がFクラスに手助けすれば、試召戦争がフェアでなくなる。

BクラスとFクラスの間に結ばれた協約に、俺が口出しする権利はないのだ。

そう考えてみると、《傭兵》のGクラスは本気で試召戦争に参加できないと言えるだろう。いくら俺が真面目に戦ったところで、試召戦争の全ては俺の外で決着がついてしまう。

「ちっ……」

思わず舌打ちが漏れた。面白くないな。

自分の置かれている立場に不満を抱きながら、俺は再び小山と雄二の交渉に聞き耳を立てる。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

ダメだ。雄二はついにBクラスに協定違反追求の理由を与えてしまった。

根本の取り巻きたちがくすくすと小さな笑い声を立てる。Fクラス討伐の大義名分を与えられて舌なめずりしていると言ったところだろう。

先ほどまでFクラスに所属していた俺としては、残念な結果になりそうだ……。

「クラス間交渉？　ふぅん……」

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねぇ……。どうしようかしらね、根本クン？」

小山がこちらを振り返り、根本を呼ぶ。根本という単語に雄二の顔が歪み、明久が首を傾げた。
小山に呼ばれた根本は、つかつかと教室の出入り口へと向かう。当然、取り巻きもそれに着いていく。
俺はどうしようか迷った挙げ句、結局根本の後を追うことにした。それがたとえどんな形であったとしても、せめて、Ｆクラスの最期は見届けてやろうと思ったのだ。

「不可侵条約なんて、当然却下。だって必要ないだろ？」
「なっ！？　根本君！　Ｂクラスの君が何で……それに雅臣も！急にいなくなったと思ったら！」

明久が驚きの声を上げる。そういえば、俺は味方の誰にも、何も伝えずここに来てしまっていた。
これは、あらぬ誤解を生むような気がしてならない。

「……あっ……」
「酷いじゃないか、Ｆクラスの皆さん。協定を破るなんて」

ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべながら、根本はＦクラスの皆を睨め回す。
雄二は根本と小山を睨み付け、明久は俺を見ている。島田やムッツリーニたちは押し黙っているが……姫路は、どこか一点を凝視したままその動きを止めていた。
雄二や明久は、最後尾に位置する姫路の異変には気付いていないようだ。彼女の視線を辿ってみれば、そこには根本が右手で弄ぶ、件の封筒があった。嫌な予感がする。

「なあ君たち。俺たちは協定で試召戦争に関する行為を一切禁止し

たはずだよな？」
「……な、何言ってるんだよ！　僕たちの教室を滅茶苦茶に荒らしておいて！」
根本の追求に、明久が条件反射が如き素早さで反論する。
教室を滅茶苦茶に……って、初耳だぞ！？
「根本、お前っ！」
根本を見やるが、彼からの答えはない。
Ｆクラスの教室を滅茶苦茶に荒らしたというのが事実であれば、俺の杞憂は的中したことになる。
相手方の教室を荒らすなんて、いくら何でも酷い嫌がらせに過ぎる。
そんな事実はあって欲しくない……が、戦場に出てきたＢクラス兵力の少なさ、雄二と結んだ協定の存在など、今まで与えられた情報の断片を組み合わせればその信憑性は一気に高まってしまう。

そして、先ほどの嫌な予感もだ。

雄二や明久らには目立たないような位置で、根本は封筒を弄んでいる。
見せたいのか見せたくないのかわからないその動きと、先ほどからそれを凝視したまま、まるで首筋に刃物でも突きつけられているんじゃないかと疑ってしまうほど、何の動きも見せぬ姫路の存在――。

――おい、待て。待ってくれ。

Ｂクラスは Ｆクラスと協定を結んだ。内容は、午後四時に一旦休戦、翌日の午前九時から同じ条件で戦争を再開するというもの。

この協定は地力で劣るＦクラスにとって、かなり有利な条件で結ばれた協定だ。

Ｂクラスにはわざわざ戦争の時間を延ばすメリットなどないのだから。

もしもこれにＢクラスにメリットがあるとすれば、今のようにＦクラスが協定違反したとき、それを弾劾し雄二の頭を取るチャンスを得ることが可能だということ。

だが、それが出来ないのであれば、Ｂクラスは明日、かなり不利な状況に立たされることになる。そう、万全の状態のＦクラスを相手取らねばならない。戦力を教室に押し込められ、出入り口には学年二位の超戦力、姫路瑞希を配置されている状況で、Ｆクラスと相対する……。

だがもし、もしも姫路を無力化できるとすれば？　その算段が、Ｂクラス側に存在するならば？

Ｂクラスはたった一つの脅威、姫路瑞希を無力化した上で、Ｆクラスを蹂躙することが可能になる。なってしまう。

じゃあ、その無力化の手段は何だ？

明久の言葉――『僕たちの教室を滅茶苦茶に荒らしておいて』――これが事実とするならば、根本はＦクラスの教室を荒らし回ったことになる。

だが、教室には雄二がいたはず。だけど教室は荒らされた。つまり、雄二が……いや、Ｆクラスの誰も教室にいないとき、つまり根本と雄二が協定を結んでいる合間に、Ｂクラスの人員がＦクラスを荒らした……。

荒らしただけか？　それは何かのカモフラージュにならないか？

……例えば、何かを手に入れたとか、盗み取ったとか……？

根本の真の目的は、教室を荒らすことによる嫌がらせではなく、姫路を無力化するための何かを手に入れることだったんじゃ――。

――全てが繋がってしまった気がした。

そうだ、この推測が正しければ、ＢクラスがＦクラスに有利な条

件で協定を結んだ理由も頷ける。
根本は三段構えで勝ちを獲りに来たんじゃない。始めから姫路の無力化が目的で……。

「――まあ、ともかくだ。先に協定破ったのはソッチなんだから覚悟してくれよな！」

根本の言葉と同時に、取り巻きたちが動きを見せる。そして、今まで隠れていた長谷川教諭も姿を現した。

「まずいぞ！　撤退する！」

雄二が叫び、他の皆もそれに続いた。明久と、姫路以外は。

「明久、なにやってる！」
「姫路さんが調子悪いみたいで！」
「チクショウ、なんなんだ！」

根本の策に嵌ってしまったことへの苛立ちか、雄二が荒い口調で吐き捨てる。
しかし、それは大きな隙だ。その隙を逃がさんと、Ｂクラスの取り巻きが雄二に迫っていた。

「もらったぜ！　長谷川先生、Ｂクラス芳野が召喚を――！」

長谷川教諭の認証により、Ｃクラス教室の出入り口に召喚フィールドが生成され、芳野の召喚獣を生み出そうとする魔法陣が床面に浮かびあがる。
光を発した後、それを収束させた魔法陣からは、芳野の召喚獣が

頭から徐々にその姿を現し始め――、

（フィールド、生成！）

――虚空へと掻き消えた。

「なにっ！？」

「なっ……」

「フィールドが消えた……？」

召喚獣が急に姿を消してしまったため、その場に残る皆が一様に驚きに彩られた顔を見せた。

この場で平静さを保っているのは、俺と、雄二くらいなものだ。やはり雄二は俺の力を忘れていない。

そうだ。急に芳野の召喚獣が消えてしまったのは、俺が《特異点》の能力を使用したからだ。

教師の認証により生成される召喚フィールドは、お互いに干渉し合う特徴を持っている。その結果、あまりにフィールド同士が近づくと互いに打ち消し合ってしまう。

召喚獣は召喚フィールド上でのみ存在可能なため、フィールドが消失すると同時に彼らもまた消えてしまうというわけ。

改めて言えば、俺の《特異点》能力、『召喚フィールド生成』を使用した結果がこれだ。

「今がチャンスだ、行くぞ姫路、明久！」

「う、うん！」

まだ意識を根本の持つ封筒へと向けている姫路を引っ張るように、

雄二と明久がCクラスを後にする。
長谷川教諭とBクラスの取り巻きがその背中を追うが、おそらくは雄二達が逃げ切る方が先だろう。
結果的に雄二達の手助けをする形になったが――、

「――おい、根本」
「なんだよ？」
「話がある。屋上まで来てくれ」

――俺は、根本を問い詰めなくちゃならない。
根本の行いに関して俺の想像が正しければ、俺がFクラスの手助けをしたことは間違いじゃないだろう。
それに、想像が正しいのなら、根本の行いは……小山を……。

「先に屋上に行ってる。絶対に来い」

それ以上考えることはやめて、短く告げた俺は屋上への道を歩き出した。

第九問（後書き）

ちょっと短いですかねえ

第十問

屋上に辿り着いた俺はフェンスに寄り掛かりながら、夕焼けの色に染まる空を見上げていた。
時刻は午後五時の少し前、生徒たちの部活動ももうすぐ終わりになる時刻で、帰宅の路につく部員たちの声が散発的に耳に届く。
どこか物悲しい、そんな風景の中で、俺が考えることは二つ。一つは、雄二達Ｆクラスの面々がＢクラスの追っ手から逃れることに成功したかということ。
そしてもう一つは、根本の行いが果たして俺の想像と違わぬ物であるのか否か、ということ。
俺の想像が正しければ、根本はＦクラスの教室を荒らし、なおかつ姫路の書いたであろう『手紙』をその手中に収めたことになる。

――そんな行為、許されるわけがない。
教室を荒らすことだって、常識的に考えて道義に反する。
そればかりか、他人の書いた手紙を盗み取るなんて――絶対に許せない行為だ。

「……」

だが、あくまでこれは想像……。もしかすると、全てが俺の誤解なのかもしれない。
だけど……そう言い切れないだけの状況証拠がある。俺の気持ちは、否が応でも沈んでしまった。
根本がやってくる様子はまだない。しかし、きっと来るだろう。
根拠はないが、それだけは確実に言える。
俺は瞳を閉じ、脳裏に眠る、過去の根本と小山の姿を思い描いた。

――そういえば、根本との馴れ初めはいつのことだったか……。

☆

「雅臣、まだなの？」
「ちょ、ちょっと待て友香！　が、学ランがない！」

階下から、玄関口で俺のことを待っているであろう友香の不機嫌そうな声が飛んできた。
俺は友香に大声で応答しながら、未だ見つかる気配を見せない学ランを探し自室を駆けずり回る。

「学ランなら昨日リビングに置いてあったでしょ！」
「あっ！　そうだった！」

勝手知りたる幼馴染みの指摘に、俺は思わず手を叩いた。流石は友香だ、俺の家を俺よりも知っている。
二階の自室から一階のリビングへと全速力で向かった俺は、欄間に引っかかったハンガーに掛けられている学ランを勢いよく引っぺがして玄関へ。
玄関のこぢんまりとしたスペースには、小学校を卒業したばかりだからか、制服姿がとても新鮮な友香の姿がある。

「準備が遅いわよ、雅臣。ま、いいけど……」

やって来た俺の姿を認め、友香は短く呟き玄関の戸を開けた。
戸の先に見えるのは、青く晴れ渡る空。気持ちのいい日差しと陽

気が、穏やかな春を感じさせる。
今日は良い日だ。俺たちの新しい学校生活が始まる日にはもってこいと言える。そう、中学校の入学式が開かれる日には。

六年の長い小学校生活を終え、早一月。俺はついに義務教育の最終段階である中学校に入学することになった。家から歩いて十五分くらいの公立学校で、家が隣同士で幼馴染みの友香も一緒だ。
中学校という新しい場所に、俺は期待を寄せている。小学校も楽しかったが、中学校はもっと楽しくなるだろうか。
世話焼きの友香にはいつも世話になってばかりだから、これから先三年間も、また彼女に助けられる日々が続くかもしれないけど。

「ハンカチは持った？　ティッシュは？　名札付けてるわよね？」

父さんも母さんも仕事の都合で海外に飛んでいて、俺は日本で一人暮らし。
だけど俺には家事能力なんてないから、色々と世話してくれているのが、何を隠そう同い年のはずの小山友香その人なのだった。

「大丈夫大丈夫、問題ないって。友香は心配しすぎ」
「あんたはいつもそう言うの。ちゃんと確かめなさい」

まるで俺の母さんか、と言いたくなるような勢いで、友香が俺の持ち物検査を始める。
俺たちくらいの年頃の男女には結構成長の差があるから、俺はまだ友香よりも背が低い。
そんな俺がこうやって面倒を見られている図は、きっと姉に世話される弟みたいなんだろう。
俺としては時折ドジったりする友香の方が妹みたいに見えるんだけどなあ……。

「うん、完璧ね。それじゃ行くわよ」
「あ、待てってば」

確認を終えた友香が、すたすたと歩き始めてしまう。
俺は慌てて家のカギを閉めた後、小走りで友香の背中を追った。
すぐに追いつき、二人肩を並べて道を歩く。

「時間、まだ大丈夫だよな？」
「大丈夫。到着しても三十分は余るわよ」

左腕につけた腕時計をこちらに見せながら、友香が言う。入学式の開始時刻は八時五十分で、今は八時ちょうど。学校までは十五分くらいだから、余裕で間に合う。
ほっと安堵のため息を漏らした俺は、視線を上げて通学路を見回した。きょろきょろと視線をやれば、同じデザインで真新しい制服に身を包んだ生徒たちがちらほらと。
堅い表情を見せているのは、きっと俺たちと同じ新入生だろう。これからの学校生活に期待半分、不安半分といったところだろうか。
俺はあまり新しい生活に移ることに関して心配はしてないんだけど……友香はどうなんだろう。疑問に思った俺は、素直に尋ねてみることにした。

「なあ友香」
「なに？」
「中学校に不安とかない？」

俺の質問に、友香は「んー……」と少しだけ考え込んだ後、口を開いた。

「ないわよ」
「ふーん、そっか」
「何なのよ、急に」

俺の質問の意図を測りかねたのか、逆に友香が尋ねてくる。
何なのかと聞かれても、特に理由はないし、ちょっと気になっただけなんだけど。
とりあえず適当に答えておこう。

「友香って気が強すぎるところあるから、友達できるかなって」
「出来るわよ！　雅臣こそ、自分の心配しなさいよね。偉そうなくせして案外気が小さいんだから」

俺の言葉に憤慨しながら、友香が結構酷い台詞を吐いてくる。偉そうなくせして気が小さいって……。
気が小さいのは……認めるのは癪だけど、まあ、一理あるかもしれない。でも、俺ってそんなに偉そうかなあ？

「背が低いくせに偉そうなのよね。洗濯も出来ないし」
「背の低さは関係ないだろ！　これから伸びるんだよ！　それに、洗濯だって出来る！　ただ機会がないだけだ！」
「機会がない？　あらそう。じゃあ明日からは雅臣が洗濯してくれるのね」
「うぐっ」

友香のツッコミに、俺は返す言葉をなくしてしまう。
正直に言うと、俺は洗濯なんて出来ない。掃除も苦手だし、料理なんて言わずもがなだ。
まあつまり、家事の全部を幼馴染みである友香に頼っているわけで……。

「……俺、偉そうかなあ」
「やってもらって当然の態度はダメね」
「ごめん友香。感謝してます……」
「よろしい」

言って、友香が勝ち誇った笑みを見せる。チクショウ、世話して貰ってる身としては強気に出れない。
せめて家事くらいは出来るようになった方が良いよなあ。いくら友香が世話してくれると言ってもそれがいつまで続くとも限らないし……。
ぶつぶつとそんなことを考えている間に、俺たちは中学校へ到着していた。
『入学式会場』と書かれた看板が横に立つ校門を、新入生が続々とくぐっていく。

「着いたわね」
「ああ、行こうぜ」

新入生の波に俺と友香も続く。
見慣れた顔もちらほらといる。手を上げて挨拶を交わしている内に、入学生を集める先生の声が耳に入った。
そちらへと流れると、手に薄い紙を一枚渡された。どうやらクラス編成が書かれた紙のようだ。
自分の名前を探すと、わりとすぐに見つかった。そしてその近くに、友香の名前も。

「そういえばクラス編成があるって忘れてた」
「でも結局同じクラスみたいだけど。腐れ縁は続くわね」
「へーへー、悪ぅございましたね」

唇を尖らせそう言うが、俺個人としては友香が同じクラスなのは喜ばしいことだった。
昔からずっと近くにいた存在だから、違うクラスに離れてしまうと言うのもなんだか寂しかったのだ。
まあ、そんなことは口が裂けても言えないけど。言ったら一生馬鹿にされ続けるに決まってる。

「新入生は体育館で待機だって。行くわよ雅臣」
「ああ、もう、ちょっと待てってば……」

ずんずんと進む友香の背中を追いかける俺（本日二度目）。
体育館に辿り着いてから数十分後に入学式が始まり、退屈な時間を過ごした後、俺たちはそれぞれに割り振られた教室へと向かった。

「長かったわね、校長先生の話」
「どこもこんなもんなんだろうな……」

入学式での校長の話は、本当に長い。小学校の頃の校長も相当長かったけど、中学校の校長もそう変わらない。
話している相手の方は満足かもしれないけど、ずっと立たされているこちらは退屈な話に加えて肉体的疲労が重なるから結構大変だ。
ちょっとだけ張った気のする両脚を叩きながら、俺は再び友香と連れ立ち廊下を歩く。
初めて訪れる廊下を歩くのは、なんだか新鮮な気分だ。自分たちの教室までの道をしっかり覚えておかなくては。

「あ、そうだ雅臣。自己紹介の時に恥ずかしいこと言うのはやめなさいよ」
「恥ずかしいことって何だよ」

「恥ずかしいことは恥ずかしいことよ。雅臣は案外バカだからべらべらいらないこと喋りそう」

幼馴染みからの信頼が薄い男、一条雅臣。

「まあ、友香に世話されてることは言わないどく」

「よろしい」

やっぱり、女子としてはそういうことを話題に出されたくないものなんだろうか。

俺もちょっと恥ずかしい面はあるけど……ってなるほど、俺が恥ずかしいって思うのと同じで友香も恥ずかしいのか。

これはますます自分で家事が出来るようにならないといけないか……。でも料理とか、包丁とか難しいんだよ……。

とか、またもや考え事をしている間に俺たちは自分のクラスに到着した。

黒板に張り出された自分の席に腰掛けて五分ほど。まだ若そうな担任が姿を現し、「入学おめでとう」の言葉を皮切りに色々と中学校生活を送るに当たっての注意事項等を教えてくれた。

連絡等も全部済み、ついに自己紹介の時間。

名前の都合上、俺は三番目の自己紹介だが、

「一条雅臣です。これから三年間、よろしくお願いします」

無難に締めてしまった。その五人後くらいに友香も続き、俺と同じような感じで自己紹介を締めていた。

他のみんなも考えるのが面倒な人は俺たちと同じような自己紹介をしたり、あるいは第一印象が大事と考えたのか笑いを取りにいったり、色々な人がいるようだ。

みんな良い人が多そうで、なによりだ。喧嘩とかは望ましくないし……。

そして、つつがなく自己紹介の時間は終了し、新入生は記念撮影の後に解散。

青空の下で何枚か写真を撮られた後、荷物を取りに俺と友香の二人は再び教室へと戻ってきていた。

「ふぅ……。今日はこれで終わりね」

「あー疲れた。早く帰ろうぜ、友香」

「はいはい、そうしましょ」

鞄を手に、校舎を出て行く俺たち。

同じく写真撮影を終えて初めての登校を終える新入生たちの波に混じりながら校門までの道を歩いていたら、目の前で何かもめ事が起こっている様が見て取れた。

男子生徒が三人いて、内一人が残りの二人に詰め寄られている図だ。背の低さから言って、一人の方は新入生だろう。二人の側は上の学年――先輩達だろうか。

「おい、センパイにぶつかって謝罪もねぇのかよ？」

「あ、謝ったじゃないですか……」

「あ！？　口だけで済むと思ってんのか、おい！」

耳をそばだてれば、こんな会話が聞こえてくる。

なるほど、新入生の方が先輩達にぶつかったことにイチャモンをつけられているらしい。

先輩達の見てくれは金髪にピアスやらシルバーやらをじゃらじゃらとつけた、俗に言う不良のそれで、詰られている生徒含めて周りの生徒は居心地が悪そうだ。

かく言う俺も、荒事はあまり向いてないタチだから、ちょっとね

……。

「……あれって、同じクラスの根本クンじゃないかしら」

「え？」

俺が先輩達の雰囲気に気圧されていると、今まで黙りこくっていた友香が思い出したように呟いた。

言われて俺も新入生の方を見てみたら、確かに見覚えのある顔……というか、ついさっき見たばかりの顔があった。

友香は人のことを覚えるのが早いな。いやそうじゃなくて……そうか、同じクラスの人だったのか。

「……助けたほうがいいかなあ」

「先輩達は気が短そうだけどね……どうかしら」

顎に手を当て思案顔の友香。

俺たちがそんなことをしている間に、ついに痺れを切らした先輩が根本に手を上げてしまった。

「うわっ！　な、なにするんですか……！」

呆気なく張り倒される根本。だが、先輩達を仰ぐ根本の顔には静かな怒りが見える。

理不尽な暴力に反抗的な目を見せたことが余計先輩達の感情を逆撫でしたのか、嫌な笑みを顔に貼り付けた先輩の一人が、根本を無理矢理引き摺り起こした。

「お前、先輩に逆らう気みたいだな……。ちょっと教育してやるよ」

「は、離せ！　なにするんだ！」

「ひゃはは！　元気だねえ！　お話はたっぷり裏で聞いてやるか

らよ！」

為す術もなく引き摺られていく根本と、哄笑を上げる先輩達。三人の影はやがて校舎の影に消えていった。

「あーあ……可哀想にな……」

「初っ端からツイてないやつだな……」

周りで三人の動向を見守っていた皆は、口では根本の不運に同情しながらも、関わり合いを避けるべく帰宅の路に着く。

俺もその中に混じろうかと考えてしまったが、思い直して足を出すことをやめた。

もしも自分が根本の立場だったら、どうだろう。

口では同情するけど、特に何もしてくれない人達ばかりの間で新しい学校生活を送るなんて、辛いんじゃないだろうか。

何から何までが一変する中学校生活の始まりがこんなのだなんて、きっと嫌だろうな……。

「……友香、ちょっと先に帰ってて」

「雅臣、何する気？」

「根本を助けに行ってくる！」

俺は基本、一度決めたらとっとと動かないと気が済まないタチだ！

友香を巻き込むわけにはいかないから、とりあえず鞄だけは渡しておいて、俺は根本と先輩達の消えた校舎の影へと向かった。

後ろから友香の、怒りと焦りをない交ぜにしたような声が聞こえてきたけど、今は無視！

「ちょっと、雅臣……あの馬鹿ッ！」

校舎の影を目指して走った俺は、体育館の裏に続く道の途中で、ついに立ち止まる三人の姿を確認した。
根本が一人に胸ぐらを掴まれていて、もう一人はその横で下卑た笑みを浮かべている。これから先根本に振るう暴力のことでも考えて舌なめずりしているのだろう。
どうにかして、根本を助け出す方法はないだろうか。二人の先輩の注意を逸らして、その内に根本と共にずらかるか。
いや、でも先輩達の注意を引く方法が思い浮かばない。大きな音がするような物を持っているわけでもないし、そんな物を使ったところで追いつかれてしまうのがオチだ。
ということは。
先輩達が根本にやろうとしていることを逆に仕返すのが最善か？
幸い、先輩も根本もこちらに気付いている様子はない。今なら、先輩一人の背中目掛けてドロップキックの一発をお見舞いするのだって余裕だ。

「よし、やろう」

さっきも思ったことだけど、俺は基本、思い立ったら動くタイプの人間だ。
ここから先輩達の元へは目測十メートル。うん、ドロップキックをかますにはぼちぼちの距離だ。
すぅ、と息を吐いて、精神統一。正直ドロップキックなんてやったことないけど、大丈夫。なんとかなるだろう。
脳裏にふと、「雅臣は気が小さいんだから」とため息を吐く友香

の姿が浮かび上がる。俺は大きくかぶりを振って、今は邪魔な彼女の姿を頭から締め出した。
視線を三人に戻すと、もうそろそろ先輩達が根本に直接的な暴力を働きそうに見えた。
迷ってる暇はない。俺は全力を持って駆けだした。

「うおおおおっしゃあああああッ！」

声を上げながら、突撃！

「なっ！？」

先輩の一人が俺の声に反応して顔をこちらに向ける。
驚愕に見開かれたその目に若干の自尊心を満たしながら、俺は飛んだ。

「――ぶっ飛べえええええええぇぇぇェッ！」
「ぶごぇぁっ！？」

右足に全力を乗せて、先輩の背中をぶち抜かん勢いで蹴る！
案外軽々と吹っ飛んだ先輩の姿に、もう一人の先輩と根本が唖然とした顔を見せていた。

「やれんじゃん、俺！」
「……て、テメェ、何してくれてんだオラァッ！」
「うっせええ！　根本を離せええ！　ッシャアアアアッ！」
「ごふっ！」

なんか今俺、変なアドレナリン出てる。絶対出てる。
奇声を上げながら、根本を掴んでいた先輩の脇腹目掛けて蹴りを

繰り出す。
爪先がクリーンヒットして、先輩は痛みにその顔を歪めた。同時に手が緩んで、胸ぐらを掴まれていた根本が解放された。
「ご、ごほっ！　き、君は……？」
ずっと掴まれていて息が苦しかったのだろう。地面に手をつきながら咳き込む根本が、問うてきた。
「俺は一条雅臣。よろし――ぐっ！？」
「ハッ！　よくもやってくれたなオイ！」
根本に自己紹介をしている途中で背中に強い衝撃を受けて、俺は地面に転がった。
そうだ。ドロップキックをかました先輩はともかく、脇腹に蹴り入れた先輩は普通にダメージが少なかった！
立ち上がろうとするけど、案外受けた衝撃が大きくて体が言うことを聞かない。
そういや、こういう本格的な喧嘩ってのは初体験なんだよな……。やばい、今頃になって足震えてきた。
「一年の癖に舐めた事してくれんじゃねェかよ……。二度と逆らう気わかねぇようにしてやるよ！」
「がっ！？」
背中の次は、腹に強い衝撃。先輩の蹴りだ。
思わず朝食べた物が逆流しそうになる。
痛む腹を抱えながら見上げた先輩の瞳は怒りに燃えていて――今さらながら、俺は後悔し始めていた。

「あ、あの……すいませんでした」
「今さら許されると思ってんのかてめぇは！」
「あ、あはは……やっぱ無理ですよね……」

正直に謝ったけど無理っぽい。
根本も、いつの間にか復帰しているドロップ（食らった）先輩に羽交い締めにされている。
万事休すだ。中学校生活初日からこんな暴力的なイベントが起こるとは思っていなかった。

ああ……体に痣作ったら、友香が怒るかな……。心配もするよな……。
でも、根本を助けない選択肢はありえないし……ああなんかもう……腹も背中も痛くてやばいかも。

「お前ら！　なにをしとるか！」
「ゲッ！　先公だ、逃げるぞ！」
「チッ！　覚えとけテメエら！」

な、なんだ……？
妙に野太い声と、焦ったような先輩達の声と共に、いくつもの足音が遠ざかっていくのを感じる。
先生がやってきて、先輩はそれに追われて逃げていったのかな……？　何にせよ、これで助かったか……。

「や、やれやれ……あいたたたた……。根本、大丈夫……？」
「あ、ああ、俺は大丈夫だよ……でも君は……」
「だ、大丈夫。体は多分丈夫だから……。それより問題は友香……」
「雅臣ッ！」

あ、やばい。ていうかどうしてここに……？

「あんた、ほんと……何でそんな無茶して！　馬鹿なの！？」

体を起こしかけた俺の側に寄って、友香が怒鳴り声を上げる。

だけどその顔は心配のあまり血が上ったのか真っ赤で、ついでに言うとその瞳にはうっすら涙すら見えた。

体のダメージはそこそこ大きいけど、友香をこれ以上心配させるわけにもいかない。

「大丈夫。とりあえず、根本も助けられたし、万事オッケーだって」

「よかった……本当に……。根本君も、大丈夫なの？」

本当に胸を撫で下ろしたような顔で友香が言って、すぐ側の根本に視線を向けた。

「あ、ああ、俺は無事だけど……君は……？」

「私は小山友香よ。この馬鹿が何も考えずに飛び出していったから……先生を呼んできたの」

なるほど、先生の声と友香がここにいる理由はそれか。

ていうか、馬鹿とは何だ馬鹿とは！

「俺だって考えたんだぞ。ドロップキックかましたんだからな」

「そういうところが馬鹿なのよ……もう。……ほら、立てる？」

「ん、サンキュ」

先に立ち上がった友香の手を借りて、俺は立ち上がる。

そのまま座り込んでいる根本の元まで歩いていって、俺は彼に手を差し出した。

「はいよ」
「あ、ありがとう……」
「よっ、と」

軽く引っ張り上げて、根本と相対する。
共に直立すると、俺は約頭一個分根本よりも背が低かった。畜生、背が高いなんて羨ましい。
ま、そういう感想はともかく。

「改めて。俺は一条雅臣。よろしくな」
「え……あ、……根本恭二だ。よろしく。あと、ありがとうな」

二人、右手を差し出してがっちりと握手を交わす。
同じクラスの学友なんだから、助け合わないとな。

「私ももう一度自己紹介しておくわ。小山友香よ、よろしくね、根本君」
「あ、ああ、こちらこそ」

友香と根本が握手を交わす様を見届け、俺は口を開いた。

「んじゃ、帰ろうぜ。もちろん根本も一緒にな」
「ええ、そうね。帰りましょ」
「……二人とも……ありがとな」

根本の言葉に、俺は笑顔をもって返答とした。

これが、四年前、俺と根本の、初めての出会いだった――。

☆

「……懐かしいな」

ふっ、と小さく笑みを浮かべて、俺は過去に思いを馳せることを止めた。

俺たち三人は、中学生活初めての日からの付き合いだ。三年間ずっと同じクラスで過ごした俺たちは、いつも一緒にいる仲の良いトリオだった。

だが、根本と小山の交際を機に疎遠になって……。今はこの様だ。

「いや、俺が逃げてただけなのかな……」

中学最後の年に、俺は根本から「小山に告白するつもりだ」という言葉を告げられた。

男女三人がずっと仲良しの関係でいられないこと。それは、何となく予想がついていた。思春期の男女はそういうものだ。

だから俺は、根本のその思いに何を言うでもなく、ただ流してしまった。今までのこの三人の関係を、気に入っていたから。

三人の関係を崩したくなかったのに、根本がそういう気持ちを――心地よい関係を崩してしまう気持ちを――抱いていると知って、俺はどこか勝手に幻滅したのかもしれない。

結局、根本が小山に告白して、二人は交際することになった。

それ以来、俺は二人と距離を置き、小山から世話を焼かれることがないよう、己の家事能力を磨くことに専念し……。

そして、文月学園に入学した。

「勝手だよな、俺」

自分から離れておいて、今度はまた二人に近づこうとしている。
身勝手も良いところだ。だけど……。

「……根本を止めなきゃ、小山が傷付くかもしれない……いや、下手すりゃ二人ともだ。それは……ダメだ」

いっそ俺が入る隙間など無くても良いから、二人には楽しくしてもらいたい。そのための努力は惜しまない。
それが、中学時代の親友である俺の願いで……根本と小山に出来る唯一のことだと信じている。

「……だから根本、お前の行いは絶対に止めてやる」
「……へぇ、そうか……」

ついに根本が、屋上に姿を見せた――。

第十一問

「まどろっこしいのはやめる」

屋上の出入り口からフェンスにもたれかかる俺の元までゆったりと歩いてきた根本が、その足を止める頃合いを見計らって、俺はそう口を開いた。

俺の言葉に根本は僅かに眉を上げて、全てがわかっているような口ぶりで言う。

「じゃあ、聞かせて貰おうか？」

「Fクラスを荒らしたのが事実か否か。後は、お前がさっき手にしていた手紙が、誰の物であるのか」

「……ふ、ククッ……見られてたか……」

やれやれ、とでも言わんばかりに大仰な仕草で両手を上げる根本。その姿からは、全てを認めているような雰囲気が感じ取れてならない。

「……ま、聞かなくてもわかるんじゃないのか？」

「お前の口から聞かないことには始まらない」

「へえ、そうかい……」

あくまでもこちらを小馬鹿にしたような態度を崩さない根本に、若干の苛立ちを覚える。

どちらかと言えば俺の方が無茶苦茶を言っているのは自覚しているものの、癇に障るものは癇に障る。

これすらも根本の策謀の一つかもしれないけれど。

「じゃ、答えてやるよ。わざわざ俺を呼び出してまで聞きたかったことらしいからな」
「助かる」
根本が口角を吊り上げ、若干の溜の後に答えを告げる。
「――お前の予想は大正解」
「……」
疑念は確信へ。聞きたくなかった答えが、ついに根本の口から飛び出した。
今の俺の心の中では、暗く沈む思いと、全てが予想通りであったことに対する諦念が渦巻いている。
不思議と、ショックは少ない。やっぱりそうだったのかという気持ちの方が強いのか。
つまり俺は、根本を信じ切れはしなかったわけだ。まったく、嫌になる。
「Bクラスを荒らすように指示したのも俺。荒らした教室から、あの手紙を持ち出すように命令したのも俺だ」
「……」
「あの手紙が誰のものかってのは……ま、言わずもがなよ。俺たちが真っ先に潰すべき最大の脅威の物さ」
「……姫路、瑞希」
だいせいかーい、とおちゃらけた口調で根本が嗤った。
結局、全部、全部が俺の予想通り。根本がやったこと、全てがだ！
「――根本」

「なんだよ？　卑怯だってか？」

こちらを睨みながら、根本が唇を尖らせる。
その語調には、明らかな不満の色が見え隠れしていた。

「卑怯……どころじゃねえだろクソッタレ……」
「ハッ！　じゃあ何だ、最低ってか！」
「ああ、そうだよ根本！　お前は最低だ！」

根本から俺への問いかけに、挑発を含めた首肯を返してやる。
俺のこの言葉が、根本の何かに触れたのか、奴の顔が若干歪んだ。

「……知ってんだよ、そんなことはよ」
「何……？」
「俺が最低なのも何も全部知ってるって言ってんだ」
「お前……」
「フン、まどろっこしいのは抜きなんだろ？　まだ何か言い足りないんじゃないのか？」

根本が自嘲げに言い放った言葉に気を取られるが、直後に続いた、核心を突くその一言で我に返った。
そうだ、俺にはまだ言い足りないことがあるし、やり足りないこともある。
それは即ち――、

「――手紙を姫路に返して、謝罪しろ。明日の試召戦争再開までになら……まだ間に合う」
「……は？」
「お前が教室を荒らさせて、手紙も手中に収めた事実は消えない。だけど、それを償う余地はあるだろ」

Ｂクラスとｆクラスの試召戦争は一時休戦し、明日の朝九時から再開される。
姫路のしたためた手紙は現在根本の手にあるが、その手紙が直接的な影響――試召戦争の行方を左右するほどに大きな影響――を与えるにはまだ時間がある。
試召戦争再開までに手紙を返せば、姫路は万全の状態で試召戦争に参加することが出来る。
当然Ｂクラスには厳しい展開になるだろうが、このまま手紙を手にして姫路を封じ込めたままで戦うより、余程良い。

「お前。このまま行けば、取り返しがつかなくなるぞ」
「どうつかないんだよ？」
「人の……それも女子の手紙を盾に試召戦争で強請をかけたとくれば、学園側から何らかの通達が出てもおかしくないだろ」

文月学園が試験召喚システムを利用した《試験召喚戦争》の開戦を生徒側に許可しているのはひとえに、生徒たちの勉強に対するモチベーションを上げさせることが目的だ。
あくまで勉学への意識向上を目的とさせるはずの試召戦争で、教室荒らしに加えて他人の私物を盗みとって強請をかけ、そして勝利を得るなど、まさしく手段と目的が入れ替わっている。
策謀を巡らせることは、ある意味では適材適所の戦いが出来るという面で学園側もある程度容認はするだろう。だが、今回の根本の行いは確実にアウトだ。

「軽くて停学、下手すりゃ退学だぞ」
「フン、そんなものが怖くて卑怯者がやってられるかよ？」
「……俺は真剣にお前を心配してるんだ。茶化すな」

確かに俺は、根本とは距離を置いていた。置いてしまっていた。
だが、だからといって、俺が根本の行いを無視し、自由にさせるつもりはない。
たとえ今は距離を置いていたって、共に過ごしてきた時間は存在する。そんな時間を無視できるほど、俺はドライな人間じゃない。

「高校に入ってからは……お前とは距離を置いちまった。けどな、お前が友人だってのに変わりはないんだ」
「へぇ、それで、俺を止めるって？」
「そうだ、何が何でもな」

根本を止め、姫路へ謝罪させ、少しでも彼の罪を軽くすること。
それが、今の俺に出来る、根本の友人として精一杯の行為だ。
そして、根本にそれをさせるためには……、この拳を振り上げることだって、《特異点》としての力を使うことだって厭わない。

「勝負をしようぜ、根本」
「勝負だぁ？」
「殴り合いは傷が残るから、召喚獣で勝負だ。……当然、負けた側が勝った側の命令を聞く罰ゲームアリでな」
「……ふん、面白いじゃないか。勝って俺に手紙を返させる気か」
「謝罪もさせる。人の心を弄ぶなんて許されないだろ？」
「お前がそれを言うかよ……！」

根本が小さく何かを呟いていたようだが、風とカラスの鳴き声に掻き消され、上手く聞こえなかった。

「……《フィールド生成》！」
「フン、さっき長谷川先生のフィールドが消えたのは《特異点》の力か」

屋上の一部分に出現した召喚フィールドを見、根本が言う。
「干渉させて貰った。フェアじゃないかと思ったが……お前の行いを鑑みればお釣りが来るだろ」
「ハ、言ってろ。《試獣召喚》！」
「出ろ、《試獣召喚》！」

俺と根本、二人の召喚獣がほぼ同時に、その姿を屋上の床の上に現した。
俺の相棒はいつもと変わらぬ二刀流の軽装騎士。対し根本は、数珠で繋がれた大鎌二つを持った、どこか武将然とした出で立ちの召喚獣を召喚していた。

「教科設定は？」

俺への威嚇でもしたいのか、大鎌を二本振り回す召喚獣の後ろで、根本が問うた。
どの教科でも俺に負けはしないという自信の表れだろうか。確かに、根本はBクラスの代表を張っているほどの実力者だ。
Aに次ぐクラスの代表を務めていると来れば、Aクラス下位層との学力差は誤差程度。その自信も頷ける。
だからこそ、根本が姫路の手紙を使用するような、最低な手段で勝ちを獲りに行くことが残念でならない。
こいつの学力なら、クラスメイトと力を合わせて姫路に対抗することくらい造作ないだろうに……。

「……現代社会で行く」
「良いだろう。来いよ、一条」
「言われなくてもな！」

フィールドの教科を《現代社会》に指定、構築開始。
フィールドを生成し続けるには体力を消耗するが、それもやむなし。
やがてフィールドの演算が終了し、俺たち二人の召喚獣の頭上には、科目と点数が表示された。

『Ｇクラス　一条雅臣　　ｖｓ　　Ｂクラス　根本恭二』
『現代社会　１１２点　　ｖｓ　　現代社会　２１６点』

流石に、文系の多いＢクラスの代表を務めているだけはある。
根本との戦力差はおよそ１００点。厳しい戦いになりそうだ。
だが、俺には負けられない理由がある。絶対に負けるわけにはいかない！

「――先手必勝だ！」

俺の召喚獣にはゴテゴテした鎧はついていない。あくまで、急所を守る軽い鎧のみ。
それ故、その機動性はトップクラス。敵に素早く接近し、素早く葬ることこそ最も得意とする戦法だ。

「効かねえよ！」

根本の召喚獣に近づいたは良いが、向こうはどっしりと地に足を着け、大鎌を交叉させて防御に徹していた。

この得点差で防御に回られてしまえば、俺の召喚獣が与えられるダメージなどほぼゼロに等しい。
横に振るわれた俺の剣は、あっけなく大鎌に阻まれ、甲高い金属音を立てた。

「無理か」
「次はこっちから行くぜ！」
「っとぉ！」

大鎌の交叉を解き、根本の召喚獣は自身の体を軸にその二対を振るう。
なんとか召喚獣に防御させるが、１００の得点差は大きい。
軽々と吹っ飛ばされた俺の召喚獣の点数は、いきなり三桁を下回ってしまった。

『Ｇクラス　一条雅臣　ｖｓ　Ｂクラス　根本恭二』
『現代社会　８４点　ｖｓ　現代社会　２１６点』

「おいおい、こんなんで勝てると思ってんのか？」

表示された点数を見て、根本がせせら笑う。これじゃ、Ｆクラスの点数とさほど変わりはしないものな。
根本の嘲りは極々尤もだ。だが、こいつは一つだけ間違っている。
残念だけど、
「俺は別に、勝てると思ってない」

「はぁ？」

根本が怪訝そうな顔を見せる。当然だ。

勝てると思っていないのなら何故、敗者が勝者の命令を聞かねばならない勝負を持ちかけたのか、と思ったんだろう。

だが、この言葉にはちゃんと意味がある。

「――俺の勝ち以外はあり得ないってだけだぜ」

ニヤリとあくどい（であろう）笑みを浮かべ、根本を挑発してやる。

今、俺は勝てるとか勝てないとか、そういう物の見方はしていない。

俺に、勝利以外の選択肢はあり得ない！

「上等……！　後で吠え面かこうと知らないがな！」

「へっ、そうで……なくちゃな！」

フィールド生成の弊害で、若干のだるさが体に襲いかかってくる。

だが無問題だ。先ほどとは逆にこちらへ飛び込んできた根本の召喚獣、その攻撃に合わせて、的確に召喚獣を操作する。

今重要なのは防御ではなく、回避だ。防御したところでこの得点差。武器を弾かれ胴体を真っ二つに裂かれるのがオチだろう。

ならば、細かく敵の動きを観察し、回避、その後、隙を見つけた

らばそこに渾身の一撃を叩き込むのみ！

「ちょこまかと！」

「回避は十八番なんでね！」

根本の武器は大鎌のため、リーチが長い分武器に振り回される時間も長い。

その隙を見逃さずに上手く立ち回れば、その攻撃を避け続けることも可能だ。

問題は集中力を使うことと、フィールド生成の副作用の二重苦に悩まされることだが……。

「……おい、根本！」

「なんだよ、一条！」

お互いの召喚獣を忙しなく操作しながらも、俺たち二人は会話を続ける。

「どうせならついでだ、今の内に聞いておく！」

「随分と余裕だな！」

根本の振り切った大鎌に足を掛け、跳躍。続く斬撃を回避。

未だ隙は見えない。ならば、隙を見せるように話を持って行く……！

「お前はさっき、自分が最低だってことを知ってるとか言ってたよな……！」

「……ああ、言った！　それがどうかしたか！」

「……その意味、聞かせて貰っても？」

斬撃を、体を屈めることでギリギリ回避。そのまま前転することで少しだけ距離を取った。

「ただ事実を述べただけだ。自分を客観的に見ることは得意なんだよ……誰かのお陰でな！」

「ならさらに聞くがな！　お前は自分の行いを最低だと自覚してるんだろ！？」

「……だから、どうしたってんだよ！」

ついに、根本が自身の行いに非があることを認めた。

いや、元から罪悪感はあったのかもしれない。根本は、別に元から卑怯者だったってわけじゃない。

むしろ中学時代の根本は、そんな行いとは縁遠い人間だったはずだ。人間、そう短い間に自分を変えることなんざ出来やしない。

だったら、かつての根本が今の自分を許すわけはない……！　そこから、穴を広げていってやる！

「お前の最低な行いが……小山を傷つけるとは思わないのか！」

「――ッ！」

「お前は、小山の恋人だ！　片割れの行為が、もう一人を傷つけることだってある！　違うのか！？」

「そんな……そんなことくらいな……わかってるんだよッッ！」

「！？」

不味い、別のスイッチを入れたかもしれない。

根本の召喚獣の動きが、急に素早くなった。大鎌に振り回されるなんてことはなく、むしろ慣性を利用して続けざまに攻撃を繰り出してくる。

地雷を踏んだのか！？

「全部わかってるから、こうしてるんだろうが！　お前に知ったような口で語られるのはムカつくんだよ！」
「っ、とっ！　くっ、全部わかってるって……お前……？」
「友香を傷つけないために、こうしてるんだろうが！」
「何言って……？」
「友香はな……、俺なんかにゃ釣り合わないくらい良い女なんだよ！」

二重の袈裟斬りの予備動作が入る！　あれを食らえば、ひとたまりではない！
俺は苦渋の決断を下し、左の剣を相手の顔目掛けて投擲した。相手のバランスが崩れたのを見計らい、距離を取る。
だが、武器である二刀の内一本を失ってしまった。ただでさえ決定力不足な今、この状況では……流石にきつい……！

フィールド生成の副作用も、かなりきつくなってきた。こりゃ本格的に不味いな……。
体に襲いかかるだるさに音を上げそうになる俺を見つめながら、根本が静かに口を開く。

「友香には……俺の行いを見て……俺から離れて行ってほしかったんだよ……」
「……じゃあまさかお前……、そのために……」

姫路の手紙を奪うという行いを……？　そんな、まさか……馬鹿な……。

「それだけじゃねえ……とある友人は、いつも俺の上を行く。だから、その劣等感の裏返しもあっただろうな……！」
「……とある、友人……？」

「そいつは、正直なんでも出来た。明るくて、クラスの人気者、可愛い幼馴染みもいて……。そんな奴の側にいるのが、結構辛かったんだ」

無理矢理絞り出した、とでも言わんばかりの声音で、根本が言う。

くそっ……いい加減、だるさがキツくて、最後まで起きてられるかわかんねえ……。

「辛かったなら……離れる手段も……あったろ……！」

「出来るかよ……そいつは友人思いなんだぜ？　いくら離れても、また連れ戻しに来るのは見えてる」

根本の瞳は遠くを見ているようで、しかし、すぐ近くの何かを視ているように見えた。

「俺は……そいつに勝ちたかったんだよ。結局、そんなあやふやな感情で生きてきただけだ」

「……勝ちたいから、こんなことを……？」

「ああ、そうだ。こんな手段を取るしかなかった。こんな卑怯な手でも使わなきゃ、お前には勝てやしないって気付いたからな」

「な――ッ」

根本の言葉に、愕然とする。

足元に大きな穴でも出来て、その中に落ちていくような、嫌な浮遊感が俺の全身を包む。

いや、そんな、まさか……。根本が、俺に劣等感を抱いていただなんて……そんな……。

「全部事実だ。お前はさっき、勝つ以外ないって言ったな……」

「……言っ、た」

「それは俺も同じなんだよ！　ここまでやって、お前に勝てなきゃ、何も……意味がないッ！」
「ああ、そうか……そうだったんだな……」

大きく吼えた根本が、今まで動きを止めていた召喚獣を走らせた。
当然、目標は俺の召喚獣だ。大鎌を構えながら、俺の召喚獣とほぼ変わらぬ勢いでこちらへ突進してくる。
おそらく、これが最後の攻防になるだろう。あまりのだるさに、今自分が立っていられることすら不思議に思える。
召喚獣が蹴散らされるのが先か、俺がぶっ倒れるのが先か、ってとこだな……。

正直、点差は大きい……。
点数と、俺自身のコンディション。もはやこの要素から、俺の敗北以外の答えは導き出せないかもしれない。

だけどさ。だけど……絶対に負けられない時はあるんだ……。

今はもう、姫路の手紙も、何もかなぐり捨てて、俺がぶつからないといけない奴が、いるから……！

根本。根本恭二。中学時代の友人。
お前は俺の側にいるのが辛かったのか。

だから、こんな手段まで取って、俺に勝つための策を巡らせた。
Gクラスとは言え、戦争でFクラスに所属している俺に勝利すれば、それは即ちお前の勝ちだもんな。
お前の気持ちを汲み取れなかったことは謝ろう。俺の落ち度だ……。

だけど、お前も言ったとおり、俺はわりと友人思いなんだぜ……？
お前が俺を嫌おうったって、構う物かよ。
いや……もう、いくら嫌ってくれても構わない。

ただ、俺が出来るのは、そんな歪んだ努力に傾いたお前を、一発ぶん殴って、

「――目を醒ましてやるよ、根本恭二ィィィィィィィッッッ！」
「――くたばりやがれ、一条雅臣ィィィィィィィッッッ！」

振るわれた根本の大鎌に足を掛けて……、駆け上る！
目指すは、そのまま直接――召喚獣の脳天、ただ一点のみ！
「これで、終いだあああああああああああ！」

俺の召喚獣が刃を突き立てるのとほぼ同時、俺の視界の全てが真

っ白に染まった。

――もう、流石に、無理だ。

「……っつぅ……」

鈍痛に苛まれ、俺は瞼を開けた。飛び込んできた淡い光が眩しすぎて、思わず目を細めてしまう。

何が……あったんだっけ……？　頭が痛くて、どうも上手く思い出せない……。

確か屋上に俺はいて……根本もいたような……あいたたた、ダメだ、頭痛ぇ。フィールド生成は覚えてるけど。

「生成……しすぎたか……」

俺は教師でないにも関わらず召喚フィールドを展開できるが、その代償に展開時間に応じて肉体に疲労を受ける。

今回は疲労が肉体の許容範囲を超えていたのだろう。意識までぶっ飛んだのは初めてのことだ。

「……つか、ここどこだ？」

左右に頭を振ると、白いカーテンが引かれている様が目に入った。加えて言うと、俺が寝ているのはベッド。
ということは、ここは保健室か。誰かが連れてきてくれたのだろうか。何も思い出せないけど。

「……うぐっ」

だるさの残る体に鞭打って、俺はベッドから飛び降りた。
カーテンを越えて保健室の共用部分に出ると、そこに置かれているベンチには見知った顔が二人。

「……根本と小山？」
「雅臣、身体に異常はないの？」
「い、いや、ないけど……」

俺の声に反応した小山が、俺の顔をじっくりと覗き見る。近い、距離が近い！
ていうか、それより、根本は……？

「……急に倒れるから、驚いたぜ」
「あ、ああ、俺、倒れたんだな……。うん……ああ、そうか……」

苦笑いを浮かべながら、根本が言う。
根本と再び顔を突き合わせ、俺は自分と彼の二人に何があったのかを思い出した。
奴を屋上で問い詰め、ついでに、召喚獣で決着をつけようとしたんだ……。

「結局、どっちが勝ったんだ！？」

「……俺の負けだよ。やれやれだ」
「そ、そうか……」
諦念を含んだため息を漏らす根本に、毒気を抜かれる。
召喚獣を戦わせていたときは、俺に勝とうという思いが無茶苦茶強かったように思えたんだが……。
「結局、お前はあの状況で俺に勝った。やっぱり、すごいな」
「根本……？」
「一条の凄さを、改めて知ったってとこだ。……お前には、ますます勝ちたくなってきた」
「げ」
ギラギラと瞳を輝かせる根本から思わず後ずさってしまう。卑怯な手とかはやめて欲しいんだが。
「雅臣、心配しなくても良いわ」
「は？」
「根本君は自分に正直に生きることにしたって」
くすり、と笑みを漏らした小山が言う。
少しはにかんだ風の根本は、こちらに右手を差し出しながら口を開いた。
「卑怯なのも嫌いじゃないが、お前には正々堂々とやって勝ちたくなったんだよ」
「……根本……」
「もう、これ以上勝ちを献上するつもりはないぜ」
口角を吊り上げながら言う根本。なんだか、今までの根本とは違

って見える。
こう……爽やかな雰囲気がひしひしと伝わってくるぞ……。
「この手紙も、明日朝早くに返しに行く。お前ともそうだが、姫路とも正々堂々やってやるよ」
「……そっか。俺も着いていくよ」
「……ああ、頼む」

根本の豹変ぶりに着いていけない面もあるけど……これはこれで、いや、これでよかった。
中学時代の根本に戻ったみたいだ。なんだか、すごく嬉しい。きっと、また三人とも元の関係に戻れる日が来るだろう。
「それにしても……俺が寝てる間に何かあったのか？」
根本も小山も、どこかすっきりしたような顔をしているのが解せない。
いったいこの二人に何が起こったというのやら……。
「ああ、それなら」
「ええ、そうね」
二人で視線を交わし、笑みを零す。若干の置いてけぼり感が少し寂しい。
微妙にふて腐れている俺をよそに、二人は息のあった台詞――しかもかなり衝撃的な台詞――を言い放った。
「「俺たち（私たち）、別れたから」」

「……はあっ！？」

わからない！　本格的にこの二人に何があったのか全然わからない！

第十一問（後書き）

もはやレギュラーが根本と小山で、Ｆクラスが準レギュラーレベルですな

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1098q/

バカとテストと傭兵稼業

2011年10月1日14時29分発行